



0052403000

0052403-000

377.21-A728k-A

勤学語

荒木寅三郎・〔著〕

荒木前総長記念事業会

1930

AHN



勸學語

宣哲式訓辭

前京都帝國大學總長
醫學博士 荒木寅三郎先生照影



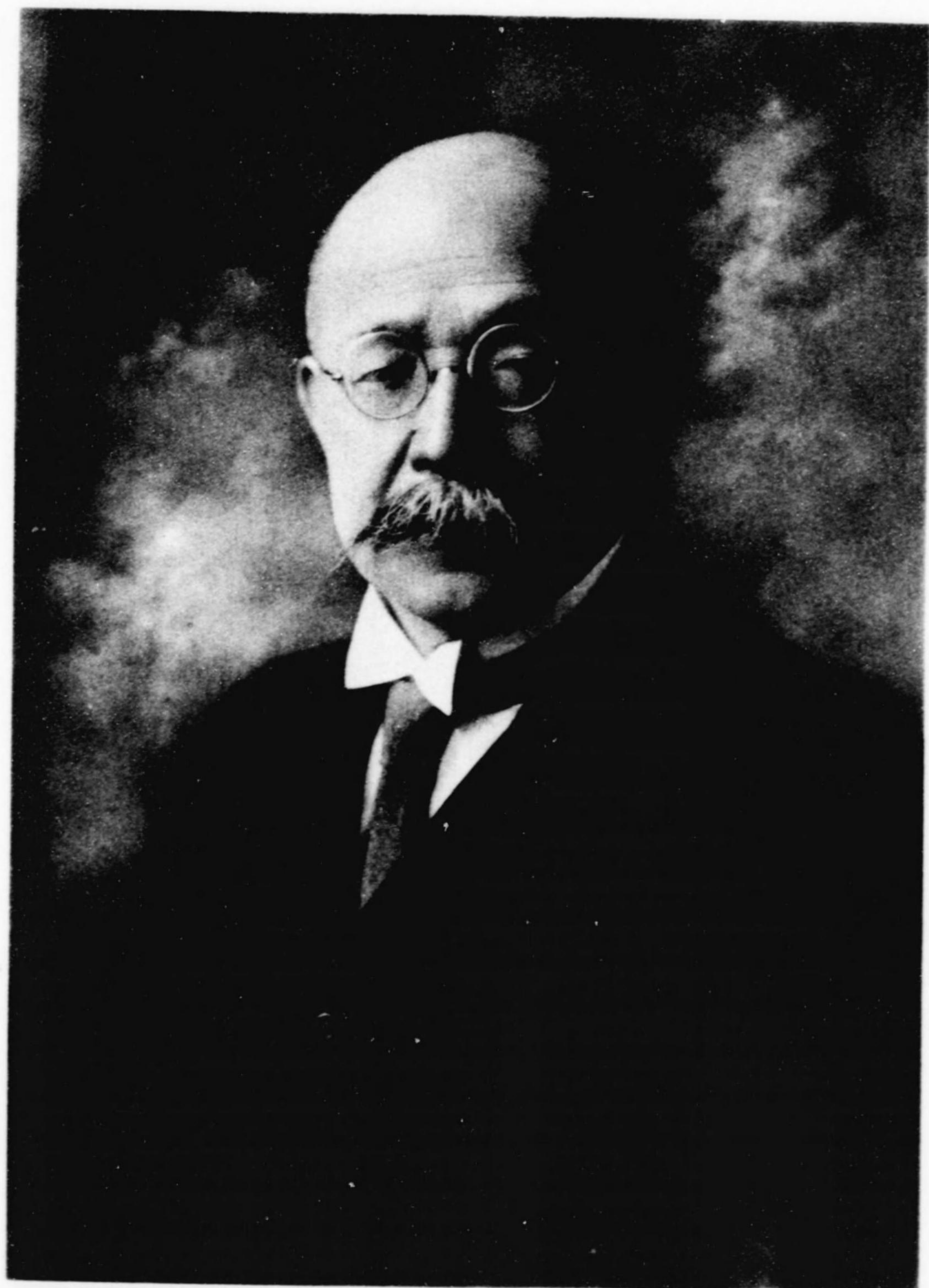
377.21

A728¹²

A



218932



37721

A728x

A



醫學博士 荒木寅三 撰
東京帝國大學醫學部



218932

序

前總長荒木先生、職ヲ我大學ニ奉ズルコト三十年。四タビ總長ノ公選ニ膺リ、教學ヲ統理スルコト十有四年。一朝官ヲ辭シテ學ヲ去ラレ、舉學ノ同人追慕已マズ。則チ茲ニ内外同感ノ諸士ト、共ニ先生ノ功德ヲ記念スル所以ヲ謀リ、歷年ノ入學宣誓式ニ於ケル先生ノ告辭ヲ印行スルヲ以テ其一著ト爲セリ。

蓋先生ノ學生ニ於ケルヤ、期待至厚ニシテ憂慮至深ナリ。故ニ其訓告ノ辭、諄諄殷殷、微ニ入り細ヲ穿チ、德業消長ノ機縁、身名成敗ノ情由、曲盡シテ掲明セザルハナク、獨リ在學士子、進德修業ノ寶訓タルノミナラズ、兼テ出身學士、立世行道ノ龜鑒タリ。今編次印行シテ遠邇ノ同朋ニ頒チ、以テ箴言ヲ晨夕ニ誦シ、教澤ヲ日

時ニ新ニセムト欲スルハ、眞ニ記念ノ本義ニ合スルノ舉ト謂フ
ベシ。
不肖乏ヲ先生ノ後ニ承ケ、祁祁タル衆士ノ、大業ヲ成シ大名ヲ立
テ、以テ先生ノ期待ニ副ハムコトヲ望ムヤ切ナリ。故ニ首トシ
テ此舉ヲ賛シ、編次成ルニ及ビ、聊蕪言ヲ叙シテ、之ヲ簡端ニ置カ
シム。

昭和五年十一月

新城新藏

目次

序	一
大正四年宣誓式告辭	一
大正五年宣誓式告辭	六
大正六年宣誓式告辭	三
大正七年宣誓式告辭	六
大正八年宣誓式告辭	七
大正九年宣誓式告辭	元
大正十一年宣誓式告辭	元
大正十二年宣誓式告辭	壹
大正十三年宣誓式告辭	其
大正十四年宣誓式告辭	允

大正十五年宣誓式告辭……………	100
昭和二年宣誓式告辭……………	103
昭和三年宣誓式告辭……………	104

大正四年宣誓式告辭



國家人才に需つあること日に殷なるに當りて、諸子の相率ゐて大學に入りたるは、洵に國家の爲に慶賀す可し。諸子は他日或は學界の棟梁と爲り、或は國家の柱石と爲る可き者にして、其責任や重く且大なり。此責任を完せむと欲せば、必ず品性高尚なる獨立の研究家と成るを要す。已に然らば、諸子は在學中學術の研鑽と品性の修養とに心力を竭さざる可からず。

學術の研鑽に必要なは、見聞の増廣なり。即ち謹みて教官諸賢の指教に率ひ、多く内外の書籍を讀みて、知識を東西古今に求むるを要す。古來碩學傑士の絶大なる發見を爲し、不朽の功業を建てたる者、固より天賦の才能人に過ぎたるに由ると雖も、抑も平生博く知識を求めたるを以て一大基因とせざるは莫し。近時學術の獨立を唱ふる人にして、往往外國の學術を問はず、唯自國內に於て思索研鑽するを學術の獨立と思惟する者ありと聞く。

何ぞ其思はざるの甚しきや。夫れ外國の學術を問はざれば、自國の學術は即ち孤立す。學術を孤立せしめ、而して其外國に凌駕して進まむことを望むは、木に縁りて魚を求むるよりも難し。誠に自國の學術をして、眞個獨立の境に進ましめむと欲せば、博く萬邦の學術を修め、因りて得たる知識を自國の事物に應用して、更に深く研鑽を加ふるに非ずむば、斷じて不可なり。獨逸のヒス氏曰く、研究は國內に行ひ、知識は萬邦に求むと、(nationales For-schen, internationales Wissen) 眞に至言と謂ふ可し。

博く知識を求むる者の陥り易き一弊あり。大家の所説を妄信すること是なり。之を權威信仰(Autoritäts-glauben)と謂ふ。此弊は慎みて之を避けざる可からず。孟子が盡信書不如無書と痛言せしも、亦此意に外ならず。夫れ智者も千慮に一失あり、大家の偉論にも微瑕なきを保せず。若し其名に因りて其説を信ぜば、往往重大の過失を招く。假令過失を招かざるも、徒に前人の繩墨を守りて自ら別に生面を開くことなくむば、後進は唯先進の盲

從者たらむのみ、安ぞ能く未發の眞理を闡明せむや。是故に苟も理に合はざるものあらば、前賢の學説と雖も之を含つるに躊躇せず、苟も疑を容る可きものあらば、先哲の實驗と雖も之を覆覈するに遲疑せざるを要す。畢竟博く求めたる知識を基礎とし、諸種の問題を過程とし、一意研討進みて已まず。唯此の如くして始めて前人未知の新事實を發見するを得、始めて獨立の研究家と成るを得るなり。

諸子の指導に任ずる教官諸賢は、諸子をして獨立の研究家たらしむるが爲に、最善至良の方を講じて心力を盡されむとす。諸子も亦務めて自ら見聞を廣め、自ら研鑽を積み、必ず獨立の研究家と成ることを期せざる可けむや。

品性の修養に最も必要なるは、諸子相互の制裁なり。凡そ高尚なる品性は、朋友の告戒勸勵に因りて始めて之を養成するを得。本學は學生の品行を以て各自の省察存養に一任し、特に規程を設けて督勵すること、中等諸學

に於けるが如くせず。故に諸子相互の告戒勸勵に需つこと一層切なるものあり。本學設くる所の寄宿舎及學生集會所は、學生の友情と品性とを修養する公所なり。本學の職員及學生の結成する學友會は、會員の親睦と修養とを目的とする團集なり。其他學内同人の隨時開催する特別講演會の如きも、其期圖する所は、學生の知見を開弘し、徳性を啓導するに外ならず。諸子は宜く此等諸機關を利用し、以て品性の修養を圖るべきなり。

人常に有徳有道の士に親炙すれば、自然に其薫化を受く。荀卿が蓬生麻中、不扶而直と曰ひたるは、洵に千古の格言なり。諸子幸に學徳俱に高き教官諸賢に従ひ、講學の餘暇、其談論を傾聽し、其行動を諦觀し、以て省察存養の資と爲さば、品性の向上、人格の薫就、自ら知らずして然るものあらむ。

大學には又學生監の設あり。學生監は、學生身上に於ける諸般の諮謀に參するを職分とす。諸子品性の修養に關し、隨時學生監に就て諮詢せば、益を得ること又多大なるものあらむ。

余乏を本學總長に承け、特に諸子が在學中學術の研鑽と品性の修養に努め、卒業後品性高き獨立の研究家と成り、以て學術の進歩に貢獻し、國運の振興を扶挽せむことを希望し、此希望を完うせむが爲に充分の心力を竭さむと欲す。諸子幸に余の希望を空うすること勿れ。

大正五年宣誓式告辭

六

茲に諸子の入學宣誓式を行ふに當り、余は先づ諸子を教養する本學の主旨を示し、次に諸子に對する余の希望を告げ、以て諸子の省察を促さむと欲す。本學教養の主旨は、諸子の知識を啓發して學理攻究の根基を培植し、諸子の品性を陶冶して高邁優美の人格を成就し、他日或は學界の棟梁と爲り、或は國家の柱石と爲らしむるに在ること、余の屢聲明したる所の如し。本學は將に此主旨に依りて諸子の教養に最善を盡さむとす。諸子亦常に此主旨を服膺して各自大成を期せざる可けむや。

余が諸子に對する首先の希望は、理想を高遠にして目前の名利に汲汲たらざること是なり。目前の名利に汲汲たるものは、纔に名利の地位を得れば自ら以て足れりと爲し、進みて眞理を討ぬるの念なく、遂に全く學業を廢するに至る。凡そ學術上の疑問は、一項の解決に於て一切を盡す可きに非

ず。纔に一項の宿問を解せば、更に數項の新疑を生ず。唯能く數多の疑問を取り、解し來り決し去りて、始めて眞理の所在を明にするを得るなり。學者の務は眞理を討究するより重きは莫く、學者の樂は眞理を發見して之を應用するより大なるは莫し。徒に目前の名利に惑ひ、一得に甘じ小成に安ずるは、學者の本務を知らざる者なり。學者の眞樂を解せざる者なり。是の如き陋劣の學者、如何に叢生續出するも、學術の進歩國運の振興に於て、復何の裨補する所かあらむ。諸子は慎みて此輩の羣に倣ふことなく、務めて理想を高遠にし、歲月の力を窮めて其實行を期せよ。

諸子。高遠なる理想を抱きて目前の利害に汲汲たらざることを以て、架空の妄想を起し、僥倖に因りて成功を徼むるの類と同一視する勿れ。凡そ學術の研究には自ら順序あり、此順序を履みて研鑽を怠らず、而して後高遠なる理想を實行するを得。古來碩學偉人の絶大なる發見を遂げ、不朽の功業を建てたるは、概ね確乎たる基礎を築き、歴歴たる順序を履みて、拮据研鑽

七

したる結果に係る。今此基礎なくして大望を起し、此順序を逐ふて努力せず、徒に僥倖に因りて、成功を夢みるが如きあらば、假令其望む所目前の名利に在らざるも、其抱く所は乃ち架空の妄想に屬し、待ちて驢年に至るも、竟に實現の期ある可からず。

次に諸子に希望するは、剛健の氣と強壯の體を養ひ、堅忍事に當ることは是なり。近來學に志す者、難きを避けて易きに就き、偏に他人の競争を恐るる風ありと聞く。果して信ならば、學界の一大殷憂と謂ふ可し。何れの學科何れの部門たるを問はず、人如し專攻して蘊奥を究めむと欲せば、必ず萬難を排し衆苦を凌ぎて事に従ふの覺悟なかる可からず。此豈に神氣怯懦、身體尪弱なる者の得て企及する所ならむや。應に知るべし、唯能く剛健の氣を養ひ、強壯の體を具へ、堅忍事に當りて、始めて學術の蘊奥を究むるを得、始めて競争場に立ちて優勝を制するを得むことを。諸子、唯神氣の剛健ならず、體格の強壯ならざるを患へよ、競争者の多く且盛なるを患ふること勿れ。

更に諸子に希望するは、長上を尊敬するの美風を發揚すること是なり。時の古今を論ぜず、洋の東西を問はず、士君子にして長上を尊敬せざるは莫し。此れ長を尊むの禮、上を敬ふの義は、社會の風教を維持する爲に一日も闕く可からざるに因るなり。然るに近時我邦の青年子弟には、驕慢を勇壯と誤解して、長上に對する禮を失し、受業の本師を視ること路傍の人の如くする者少からずと聞く。誠に浩歎の至に任へず。諸子は已に一國最高の學府に入り、其動靜云爲は、將に一般青年子弟の觀聽して倣法する所と爲らむとす。諸子たる者、行を慎み禮を守り、殊に長上を尊敬して儀範を一世に示さざる可けむや。

然りと雖も、諸子、長上の尊敬を以て、長上の妄信と混同せざるを要す。長上の妄信は、啻に學業の進修を害するのみならず、却て長上の徳を傷け名を損するの虞あり。故に假令本師の學説たりとも、理に合はざるものは之を舍つるに躊躇す可からず、假令本師の實驗たりとも、當を得ざるものは之

を改むるに遲疑す可からず。弟子にして師説を墨守せず。師業を踏襲せず。博く知識を求めて深く自ら研鑽の功を積まば、始めて出藍の研究者と成るを得可し。弟子出藍の研究者と成らば、師名をして九鼎より重からしむ可し。師名をして九鼎より重からしむるは、師恩に酬ゆる最善の道なり。師恩に酬ゆるに最善の道を以てして、而も其師を尊敬するを知らざる者は、古より未だ之あるを聞かず。乃ち知る能く長上を妄信せざる者にして、始めて能く長上を尊敬するの實を擧ぐることを。

最後に諸子に希望するは、規律を守り節制に遵ひ、公同心を長養すること是なり。凡そ團體の興衰は、團員の有する公同心の強弱に繫り、公同心の強弱は、規律を守り節制に遵ひ、私情を抑へて公義に奉ずるの勤怠に繫る。故に團員各自規律を守り節制に遵ふに勤め、私を抑へて公に奉ずるを怠らずむば、總員の公同團結は必ず強く、總員の公同團結強くして團體の聲勢乃ち振ふ。國家は一大團體なり。諸子は團員の尤も有望有爲なる者なり。他

日國民の中堅に立ちて、國勢の扶挽、文運の推進に任ず可き者なり。之を如何ぞ規律を守り節制に遵ひ、務めて公同心を長養し、以て豫め重責の擔任に備へずして可ならむや。

以上述ぶる所は、余が諸子に對する希望の最も切なるものなり。諸子幸に教官諸賢に従ひ、學術の教益を請ひ、研究の指針を仰ぐと共に、其談論を聽き、其體度を觀て、自己修省の資に供し、又諸子の監護と詢謀とに備はる學生監に就て、品性修養の指誨を受け、之に加ふるに諸子相互の勸勵切磨を以てせば、余は確信す上述希望の達成は決して難事に非ざること。

大正六年宣誓式告辭

二三

本日此堂に於て諸子の入學宣誓式を舉行するは、誠に國家の爲に慶賀す可し。帝國大學令第一條に云ふ、帝國大學は國家の須要に應ずる學術技藝を教授し、及其蘊奥を攻究するを以て目的とすと。國家は大學に寄するに、國家の須要に應ずる學術を教授し、他日國家の柱石となり、又は學界の棟梁と爲る可き人才を養成するの重任を以てす。大學生たる諸子も、亦國家社會に對して重大なる負荷を躬にすることを自覺し、常に學術の研鑽と品性の修養に心力を盡さずして可ならむや。

余は昨年の入學宣誓式に於て、新入學生に告ぐるに四項の希望を以てせり。即ち

理想を高遠にして目前の名利に汲汲たらざること、

剛健の氣と強壯の體を養ひ、堅忍事に當ること、

長上を尊敬するの美風を發揚すること、

規律を守り、節制に遵ひ、公同心を長養すること。

今次入學の諸子に切望する所も、亦此四項より重きは莫し。故に本日は唯學術の研究と品性の修養とに須要なる二三の注意を指示し、以て諸子の省察に資せむとす。

學術を研究する者は誠意なかる可からず。唯誠意ある研究者にして始めて眞理を發見するを得可し。若し學者にして研究の誠意なく、徒に學術を以て釣名弋利の具と爲さば、必ず學理を曲解して世に阿り俗に媚ひ、或は事實を虚構して自ら欺き人を欺くに至る。蓋學者才愈高ければ學理を曲解すること愈巧に、智愈多ければ事實を虚構すること愈妙、學理を曲解し事實を虚構すること愈巧妙なれば、眞理を去ること愈遠し。故に余常に謂らく、學界に於て最も危險なるは、高才多智にして誠意なき人なりと。

學術を研究する者は堅固なる意思なかる可からず。唯夫れ堅固なる意

思を以て研究の事に従ふ、故に歲月を費すこと久しきも倦まず、艱難に遭ふこと頻なるも屈せず、一世之を毀るも憂へず、學國之を譽むるも驕らず、一意邁進學術の蘊奥を究明し、前人未發の眞理を發見せずむば措かざるなり。乃ち薄志弱行の人の若きは、偶々一好問題を把捉して研究の端を開くも、其解決の容易ならざるを見れば、輒ち放擲して顧みず、更に他の問題を尋ねて容易に成果を挙げむことを希ふ。夫れ問題を易ふること愈多ければ、成果を得ること愈難し。世の聰明の人、終生研究に没頭して、竟に一業績の觀る可きを挙げざる者、職として意思定まらず、努力足らざるに由らずむはあらず。戒めざる可けむや。荀卿曰く、功在不舎。鏗而舎之、朽木不折。鏗而不舎、金石可鏤。又曰く、眞積力久則入。洵に知言と謂ふ可し。

學術を研究する者、重大の問題を擇みて深遠の研究に決意し、精研苦究層一層より深く、遂に全く疑義を解決するに至るは固より善し。然れども問題の輕小なるを以て、研究の價値なしとして之を放棄するは甚だ不可なり。

學者の本務は事物の研究に在り、研究の目的は眞理の發見に在り、何ぞ問題の大小輕重に在らむや。假令問題は輕小に屬するとも、精研深究の極前人未知の眞理を發見せむか、其學術の進歩を促し、文運の興隆を助くる所以のもの、豈に少小ならむや。且學者數多の小問題を究明して眞理探討の方法に通曉せば、他日大問題を研究するに至り、宛も熟路に就て輕車を馳するが如きものあらむ。此亦獨立研究家と爲り得るの一捷徑に非ずして何ぞや。夫の徒に初より驚天動地の業積を夢想して小研究を蔑如し、終生一事の發見をも爲さず、甘じて他人の糟粕を喫するが若きは、斷じて學術に忠なる者に非ず。

自然科学の専攻に於ては、往往先づ考案を假設し、繼で實驗に著手するの一法あり。實驗の結果如し考案に契合するときは、則ち考案に據りて之を説明し、如し考案に契合せざるときは、則ち考案を改めて之を説明す。即ち考案は實驗に左右せらるるも、實驗は考案に拘束せらるることなし。須ら

く知るべし考案を假設し、實驗を施行して其當否を判定するは、眞理探討の一便法たることを。初學者取りて研究の準則と爲さば、過を寡うするに庶幾からむ。但此に注意す可きは、自然科學の專攻者中、或は先づ考案を固定し、然る後實驗に著手する者あること是なり。此輩や、實驗の結果が考案に契合せざるを見れば、其實驗を視て無効と爲し、更に之を反覆し、其結果をして必ず考案に契合せしむるを期す。是の如きは初より考案の正確を豫斷し、單に其證明を實驗に求むるものにして、考案は實驗を左右するも、實驗は考案を改廢することなし。即ち所謂一指未だ實驗に觸れざるに、結論先づ已に成るものにして、其弊や遂に眞理を没却するに至る。Claude Bernard が *Ils experimentent, non pour chercher, mais pour prouver: leurs conclusions sont posées avant que leur travail soit commencé.* と喝破したるは、正に此弊に切中せり。初學の者尤も深く戒めざる可けむや。

品性を修養するに最も必要なるは朋友の切磋なり。諸子交互に告戒勸を期圖すべし。

勵して、始めて高尚なる人格を成就するを得可し。本學に設置せる寄宿舎、本學職員學生等より成る學友會、本學に隨時開催する特別講演會等は、皆告戒勸勵の實行機關なり。諸子宜く此等の機關を利用して各自徳器の成就を期圖すべし。

諸子は教官諸賢に従ひ、講學の餘、其談論を聽き、其行動を觀、又學生監に就き、時時人格成就の方を詢はば、各自修養の益を獲ること決して鮮淺ならざる可し。Goethe 曰く、*Der Mensch wirkt alles, was er vermag, auf den Menschen durch seine Persönlichkeit.* 方今内外多事にして、國家人材に需つあること殊に急なり。諸子幸に自重努力せよ。

大正七年宣誓式告辭

諸子。Johann Gottlieb Fichte 曰く、Nur derjenige ist ein Studierender, der eben studiert. 此語極めて簡なりと雖も、大學學生の本分を道破して餘蘊なし。蓋大學學生の本分は、各自選定せる學科を専修し、進みて其蘊奥を攻究するに在り。何ぞ他を顧み外を慕ふに暇あらむや。如し大學學生にして自己選定の學科を専修せずして、思を學業外の事物に分つ者あらば、是れ實に學生の本分を没却する者にして、獨り大學の之を寛假せざるのみならず、社會も亦之を宥恕せざる可し。

大學學生自己選定の學科を専修するに當りて尤も必要とする所は、補助の學科に通曉するに在り。各分科大學の各學科に共通して均しく必要とする補助學科は、數學及語學なり。

工科大學理科大学に屬する諸學科を修むるに、數學の補助を要するは、固

より言を須たず。唯法學醫學文學等の學科を修むる者に於ては、世間或は必しも數學の補助を要せずと説く者あり。是れ洵に謬妄の見なり。凡そ學科の何たるを問はず、之を學ぶ者數學的思考力を缺かば、其學理を理解すること甚だ難し、而も數學的思考力は、數學の練習に由るに非ずむば生ぜざるなり。

法學生が現行法の解釋及適用を學習し、法曹が現行法の解釋及適用を考按するに際して、必然生ず可き思考力の傾向は、數學生が幾何學を學習する時に於けると異なることなし。唯社會人事の法學に於けるや、點線面體若くは方圓三角等の幾何學に於けるより複雑なるを以て、事實の認定、曲直の判斷に於て推理の苦難を感ずること又幾何學より甚し。之を要するに、法學を修むる者は殊に推理の力を要し、推理の力を養ふは數學を練習するより善きは莫きなり。

醫學の基礎たる生理學は、其學說の主要部、概ね物理學化學の應用より成

る。故に生理學を修むる者にして數學の素養に乏しく、數學的思考の力を缺くときは、何に由りてか其學理を理解するを得む。其餘醫化學の如き、藥物學の如き、衛生學の如き、亦一として數學的思考力の充實を要せざるはなし。須らく知るべし醫學の一斑を窺はむと欲する者も、猶且數學の素養を少く可からず、況や進みて醫學の蘊奥を究めむと欲する者に於てをや。

政治經濟殊に統計學、哲學科の諸科を修むる者の如きも、若し數學の素養を缺き、數學的思考の力に乏しきときは、其所修の學科を理解し難きこと、復絮説を待ざるなり。

凡そ學ぶ所何の學、修むる所何の科たるに論なく、苟も之を學習し、之を理解し、之を研究せむと欲せば、必ず東西古今の書を精讀せざる可からず。苟も東西古今の書を精讀せむと欲せば、必ず東西古今の語言文辭に通曉せざる可からず。語學を練習するの必要是に於てか起る。學者如し所要の語言文辭に通ぜず、僅に譯書若くは抄録を以て學理探究の資と爲さば、常に隔

靴搔痒の憾あるのみならず、往往著者の眞意を誤解して、不測の訛謬に陥る虞あり。

法學を修むる者は、少くとも歐洲近代語の一に精通するを要す。法學を根本的に研究せむと欲する者は、歐洲近代語の外に、羅甸語、古日耳曼語等の如き古語の學習を忽略せざるを要す。試に我邦の現行法を看よ、民法、商法、訴訟法等、盡く是れ獨法系、佛法系若くは英法系の法律制度を祖述したるものに非ずや。故に我現行諸法の制度を理解せむと欲せば、必ず其祖法たる獨法、佛法若くは英法を研究せざる可からず。而して獨法、佛法、英法の現行制度は、皆是れ過去に於ける法制變遷の結果にして、實に羅馬法思想と日耳曼法思想との折衷より成れり。故に我現行の法律制度を根本的に究明せむと欲せば、必ず羅馬、日耳曼兩法系の法制に於ける制度變遷を研討せざる可からず。而して其の研討の資料と爲る可き論文、著書等の引用する法源は、多くは羅甸語若くは古日耳曼語を用て叙述せらる。應に知るべし

羅匈語及古日耳曼語を解せざる者は、我現行法上重要なる諸制度に就き、其淵源を討尋するを得ざることを。

政治經濟科を修め、其蘊奥を究めむと欲する者は、歐洲諸國の語を學習せざる可からざること論を待たず。

醫科大學工科大学に屬する諸學科、又は理科大学に屬する諸學科を修むる者も、亦少くとも歐洲近代語の一に精通せざる可からず。更に進みて其蘊奥を究めむと欲するに至りては、歐洲諸國の語に兼通するを要す。

文科大学に屬する諸學科、殊に西洋史學西洋文學西洋哲學等を修むる者は、獨り歐洲の近代語に通曉するを以て足れりとせず、更に羅匈語希臘語等の如き古語を了解するを要す。東洋史學支那文學支那哲學等を修むる者の如きも、亦歐洲諸國語の學習を忽略せざるを要す。何となれば歐洲に於ては、支那を研究し詳悉したる碩學、Legge, Yule, Giles, Rémusat, Julien, Chavannes, Klapproth, Schot, Hirth 等の如き者、陸續輩出し、其著書觀る可きもの已に多く、

將來歐洲武を偃せ文を修むるに至らば、支那學の研究家更に多きを加へ、卓說偉論の層見續出せむこと、豫想に難からざればなり。

論者或は云はむ、一外國の語に熟することも、常人の難しとする所なり、苟も特異の天才を具ふるに非ずむば、安ぞ能く數國の語に通ずるを得むやと。是れ深く思はざるの論のみ。今夫れ獨英佛伊の四國語中、如し已に其一に熟せむか、進みて他の三國語を學び得ること、常人に在ても決して難しと爲さず。唯羅匈希臘等の如き古語の學習は、近代語の學習に比して頗る難きこと固より論なし。然れども學者心力を注ぎて考覈怠らざらむか、其大義に通じ概要を解するに至るや蓋遠きに在らず。Koelliker は解剖學の泰斗なり。嘗て西班牙人 Ramon Y. Cajal の業績を檢討せむと欲せしも、西班牙語の素修なかりし爲に其原著を讀む能はず。Koelliker 時に年七十を踰え、始めて西班牙語學に志し、勤精攻苦、久しからずして素志を達せしと云ふ。今諸子年少く氣銳にして、已に能く近代語の概要を解す。若し範を Koelliker

に取りて沈潜攻苦せば、何れの語か熟達し得ざるあらむ。余は斷言す、余は難きを諸子に強ゆるものに非ざることを。

諸子既に數學的思考力を養ひ、又所要の外國語を學び、而して各自選定の學科に就て、其講義を聽き、其實習に努め、更に内外諸家の論著を取りて之を精讀せば、必ず能く學術の要義を知り、學理の妙趣を解せむ。已に學術の要義を知り、學理の妙趣を解せば、必ず學習の興味を生ぜむ。學習の興味一たび生ずれば、學識を増進し、才能を長發するに復何の難きことかあらむ。是に至りて學術研究家と爲るの基礎始めて成る。Rudolf Virchow 曰く、*Aber die Erfahrung lehrt, dass ohne Lust am Lernen ein voller Erfolg da nicht erzielt werden kann.*と。是れ蓋其實歷に得るもの、至言と謂ふべし。

程子曰く、有求爲聖人之志、然後可以共學。學而善思、然後可以適道と。何ぞ其理想の高遠なるや。學者唯斯の高遠なる理想ありて、始めて學業の大成を期す可きなり。今諸子が修むる所の學科は各相殊なりと雖も、諸子が

理想とする所は、均く程子の如く高遠ならざる可からず。即ち各自專修の學科に於て、第一流の人と爲るを期せざる可からず。夫已に第一流の人と爲るを期す、故に身を守ること固く、學に力むること專なり。已に身を守ること固く、學に力むること專なり、更に何の暇ありてか酒色に耽溺するの愚に倣はむ、何を苦みてか世に呵り俗に媚ぶるの陋を學ばむ。故に諸子の尤も戒む可きは、理想の高遠ならざるに在り。諸子の尤も患ふ可きは、意志の堅固ならざるに在り。已に高遠なる理想を抱き、堅固なる意志を存せば、學業の大成、期して待つ可し。外物の誘惑、何ぞ懼るるに足らむや。

學者に貴ぶ所は研究の至誠なり。研究に重ざる所は眞理の闡明なり。名利の得失は固より考慮の内に在らず。唯其研究の結果、眞理の功用は、或は以て世運を進轉し、或は以て國勢を振興し、或は以て民福を阜成す。故に國家社會は研究に期待すること厚く、學者を尊重すること大なり。諸子如し能く大學學生の本分を守りて學習怠らず、他日專攻科内第一流の人と爲

りて、研究の至誠を貫き、真理の闡明を遂げむか、是れ啻に諸子の顯功榮名なるのみならず、抑又國家社會の大慶至幸なり。諸子旃を勉めよ。

大正八年宣誓式告辭

世界の戰亂漸く熄み、講和會議終を告げ、各國其條約を批准するの日も亦近きに在るは、誠に慶賀の至なり。今後各國必ず將に相競ひて力を學術の振興に致さむとす、何となれば國家富強の根源は、主として學術の振興に在ればなり。我帝國も亦此間に處して機運に後れざることを務めざる可くむや。

學術の振興に必要なる施爲は、固より一にして足らず。而も其最も切要にして一日も遲緩す可からざるものは、誠意ある獨立研究家を養成することと是なり。歐米の我邦學者を評する者、往往其學術研究の能力を疑ひ、或は我邦學者を以て、徒に模倣に長じ、到底獨創の發明を爲すこと能はざるものと爲せり。是れ固より酷評にして、頗る正鵠を失せりと雖も、而も我邦學者が學術上に成就したる獨創の發明は、之を歐米諸邦の學者の成就したる所

に比すれば、獨り其實に於て頗る遜色あるのみならず、其量に於ても亦霄壤の隔なき能はず。今其由て來る所を原ぬるに、我邦學者が獨創の發明力を缺少せるに由るに非ずして、唯其發揮を妨害する事情ありしに由るもの如し。願ふに獨創發明力の發揮を妨害したる事由は枚舉に勝へず、而も余は茲に其主要のものとして左の三項を挙げむとす。

第一 外國文化の採收に急にして、獨創發明の暇なかりし國情。

第二 教育制度の不備。

第三 先進過信の弊習。

第一 外國文化の採收に急にして獨創發明の暇なかりし國情

我國民は、古代に於ては、支那の典章文物を採收して其倣行に務め、近世に於ては、歐米の學術技藝を傳習して其熟達を期せり。但其間に在ても、卓然として獨創の發明を遂げたる學者なかりしに非ず。伊藤仁齋の論孟古義

に於ける、荻生徂徠の論語徵に於ける、賀川玄悅の産論に於ける、關孝和の圓理に於けるが如きは、其尤も彰著なるものなり。輒近我帝國文化の進境、復昔日の比に非ず。夫の歐米學術の醇疵、技藝の長短を識別せずして、唯傳習を是れ力め、唯倣行を是れ事とするが若き者は、漸く其跡を絶ち、學術上有益なる業績を内外の學術新誌に發表して、重きを彼我の學界に爲す者、年と共に多きを加ふ。是に因りて之を推すに、帝國の文化更に進みて、歐米と駕を並ぶるに至らば、獨創發明力の顯著なる發揮を見むこと、殆ど疑ひを容れざるなり。

第二 教育制度の不備

我邦に於ては、從來教育制度不備の結果、學生の心力現存知識の収集に偏向し、獨創能力の修養に意を用ふること少し。即ち學生は唯教官の講義を聽きて之を筆記し之を記憶するに専念し、自ら進みて自主獨創の能力を養ふことを務めず。夫れ學者現存の知識を収集するは固より善し。然れど

も之を以て基脚と爲し、進みて自主獨創の能力を長養するに非ずむば、竟に獨立の研究者と爲り、獨創の發明を爲すこと能はず。故に學者に最も切要とする所は、自主獨創の能力を養成するに在り。Goethe 曰く、

Wissen ist Macht,

Wie falsch gedacht.

Wissen ist wenig,

Können ist König.

本學は務めて此弊を矯正せむことを期圖し、各學部の規制に於て此期圖に便ならざるものあれば、隨時に之を改廢し、學生自由學習の範圍は、務めて之を推廣し、獨創能力を養ふの便宜を與へ、且専ら試験を目標とする心神浪費を省かむとす。

學術研究の基礎已に成り、進みて大學院に入り、學術の蘊奥を究めむと欲する者あらば、本學は之に許すに研究の自由を以てし、且各學部及各教室の

聯絡を密切にして研究の便宜を加へ、其効果の結成に萬遺憾なからしむるを期す。

本學設くる所の各研究室の設備は、固より未だ完全なりと謂ふを得ず。本學備ふ所の研究費も、未だ潤澤なりと謂ふを得ず。然りと雖も學術の研究は、唯完全なる設備と潤澤なる經費とのみに因りて成就す可きに非ず。學術の研究と其効果の結成に最も必要なるは、誠意ある獨立研究家の資格なり。學生をして獨立の研究者たらしむるに最も必要なるは、完全なる設備に非ず、潤澤なる經費に非ず、誠意ある研究家の指導なり。

Berzelius が化學を研究したるや、精巧なる機械ありしに非ず、豊富なる資金ありしに非ず。而も偉大なる業績陸續世に出て、啻に當時の學界を風動したるのみならず、天下後世を裨益したること淺小ならず。Dumas は平素 Berzelius に慊焉たり。而も其業績を見る毎に歎賞措かず。曰く、Berzelius の研究成績は再試の要なし。再試すれば唯其精確を證明するのみと。

Johannes Müller が伯林大學の教職に在りしや、完全なる設備ありしに非ず、潤澤なる經費ありしにも非ず。而も Du Bois Reymond, Brücke, Helmholtz, Virchow 等の碩學其門下より輩出せり。

諸子誤解する勿れ、學術の研究に完全なる設備、潤澤なる經費の必要なしと。設備經費の學術研究に於けるや、多多益善きこと論を待たず。余は唯誠意ある研究家の更に是より急要なるを陳べたるのみ。若し誠意ある研究家に與ふるに、完全なる設備と潤澤なる經費とを以てせば、人を兼ねるの才分なしと雖も、猶以て相當の業績を擧ぐるに足らむ。況や天資絶倫なる者に於てをや。Bacon 曰く、For the cripple in the right way, (as the saying is) outstrips the runner in wrong.

第三 先進過信の弊習

學者先進を尊崇するの極、遂に先進を以て企及す可からずと爲し、盡く其言ふ所を信じ、一に其行ふ所に従ひ、進みて自ら新知識を開發するの念を起

さざる者、往往之あり。此れ實に先進を過信するの弊習にして、歐人之を權威信仰 (Autoritäts glauben) と稱す。權威信仰は、學者獨創發明力の發揮を沮止すること甚だし。余大正四年九月の入學宣誓式に於て、略其弊害に説及せり。顧ふに大家の學説なりとも、固より誤謬なきを保せず。碩學の實驗なりとも、時に過失あるを免れず。後進の士は、必ず須らく仔細に之を檢勘し、苟も理に合はざるものあらば、決然として之を捨て、苟も當を得ざるものあらば、斷乎として之を正すべし。唯夫れ此の如くして始めて、獨創の發明力を發揮し、獨立特行の研究家と成るを得るなり。夫の弟子にして師説を墨守して、毫も自ら發明する所なき者の若きは、啻に其學に忠ならざるのみならず、亦其師に忠ならざる者なり。

Carl v. Voit は自己の實驗に據り、其師 Justus v. Liebig の筋力の根源に關する學説、即ち蛋白質のみを以て筋力の根源と爲せる説の不備を詳論し、遂に無窒素物脂肪、含水炭素が實に筋力の根源たることを證明せり。此の如

きは嘗に弟子の禮を失せざるのみならず、適以て其師の偉大を成したるものと謂ふ可し。

Julius Cohnheim が炎症の研究に於て、其師 Virchow の學說を墨守せず、進みて白血球が病變せる血管壁(毛細管及細靜脈)より透出する事實を確證し、遂に之を基礎として、炎症の新學說を樹立したるは、亦是れ學界の一美事にして、Virchow 學派の衿誇と爲す所なり。

余は切望す諸子が斷じて先進過信の弊習に染むことなく、務めて自主獨創の能力を養ひ、他日必ず教官諸賢に凌駕す可き偉大なる獨立研究家と成らむことを。

我邦學者の獨創發明を妨害したる原由は、近來漸く除去せられ、我學界は將に模倣時代より獨創時代に入らむとす。此時に當りて、他日獨立の研究家と成る可き諸子は、特に自ら責任の重大なるを省み、確乎たる學術研究の根基を培植せざる可けむや。

學術研究の根基を培植するに當り、諸子の殊に用意す可きは、所修學科の選定なり。近時學科を選擇する者、妄に學術を以て名利の具と爲し、偏に名利を得るに便なる學科を擇み、曾て自己の資質に適するや否やを顧慮せざるの風ありと聞く。果して聞く所の如くならば、洵に深く憂ふ可きことなり。夫れ資質に適せざる學科は、終身學修するも、大成を期し難く、名利を目的とする學習は、資質に適する學科と雖も、成業を望み難し、況や資質に適せざるものに於てをや。蓋志、名利に存する者は、心、學習に専ならず、僅に名利を得れば、遂に學習を廢するに至ればなり。抑も知識を愛し、之を得るを樂むは、人の本性なり。故に學者知識を得むが爲に、自己の資質に適する學科を選び、學習怠らずむば、知識日に月に多きを加へむ。知識多きを加へむには、學習の興味油然として生ぜむ。學習の興味生じて已まずむば、獨特研究の意志勃然として興らむ。學術研究の根基は、此の如くして始めて之を植つるを得るなり。學術研究の根基既に植ちて、漸く學術の蘊奥に進み、遂に

獨立研究家の域に入らば、榮名美利は求めずして自ら臻らむ。余故に謂らく、名利の爲に學に志す者は、名利を得ること難く、知識の爲に學に志す者は、名利を得ること易しと。

學術の蘊奥を研究するに至り、諸子の用意す可きは研究問題の選擇なり。研究問題は、遂行の興味最も深く、解決の自信最も厚きものを選択す可し。如し興味の有否、自信の有無を顧みず、初めより實際の功用を量りて問題を選択せば、遂に失敗に歸せざるもの希なり。學術研究の要は、知識を擴充し眞理を闡明するに在り。縱令研究の結果、或は直に實用を濟さざることあるも、時到期熟して一朝應用の途に就くに及べば、其功用往往意想の表に出づるものあらむ。

Adolph v. Baeyer が藍青を合成せしは、實に化學上の偉績なり。然れども他日人造藍青の輸出額三千八百萬マルクに上り、印度藍の生産をして昔日の六分に減ぜしむるに至らむとは、發明の當初夢にだも想見せざりし所

ならむ。

Philipp Reis が送音の事實を確證し、Alexander Graham Bell 及 Elisha Gray が人語を傳送し得る電話機を發明したるは、學術の進歩に貢獻したること固より多大なり。然れども當時唯か料らむ、他年 Thomas Edison, Hughes, Henry Hunning 等の諸氏が、此發明に基きて研鑽を累ね、遂に百般人事に須臾も闕く可からざる完全の電話機を製出するに至らむとは。

Emil Fischer が *Aber was heute nur Kuriosum ist, kann morgen schon nützlich werden* と云ひしは、眞に我を欺かざるの言と謂ふ可し。

諸子にして能く自主獨創の能力を養成し、進みて數多の研究問題を解決して眞理闡明の法を理解し、尙勵精已むことなくむば、卓然として獨立の研究家と成らむこと、決して難しとせず。卓然たる獨立の研究家學界に森列せば、帝國學術の振興期して待つ可し。

諸子。國家の最も尊重するは、鉅萬の財を擁する富豪に非ず、高位顯官の

人に非ず。國家の至寶は誠意ある偉大の研究者なり。余は切望す諸子が誠意ある偉大の研究者と成ることを。余は期待す諸子が國家の至寶と成ることを。

大正九年宣誓式告辭

大正七年十二月五日發布せられたる新大學令第一條に曰く、大學は國家に須要なる學術の理論及應用を教授し、並に其蘊奥を攻究するを以て目的とし、兼て人格の陶冶及國家思想の涵養に留意すべきものとす。之を舊帝國大學令第一條に比すれば、特に人格の陶冶及國家思想の涵養に留意すべきもの等の語を加へたるを見る。應に知るべし國家が如何に人格の陶冶及國家思想の涵養に重きを注げるかを。

凡そ一職一業に従事する者、其何の職何の業たるに論なく、苟も人格具はずむば、假令才能餘りありとも、其目的を大成すること難し。學者にして人格に虧缺あらむか、啻に眞理を發見し應用して、國家社會を裨益するを得ざるのみならず、其學識才能は、適ま以て身を誤り家を破り、遂に國家社會を害するに至る。

學理を曲解し、世に阿り俗に媚ぶるは、人格具はらざる學者の通弊なり。難きを避け易きに就き、終生一も發明する所なきは、人格具はらざる學者の通弊なり。虚名を貪り下問を耻ぢ、實力の養成を怠るは、人格具はらざる學者の通弊なり。私好に偏倚し、問題の両面を見ること能はざるは、人格具はらざる學者の通弊なり。事實を虚構し、己を欺き人を誤るは、人格具はらざる學者の通弊なり。己の足らざるを省みず、偏に人の功を成すを忌むは、人格具はらざる學者の通弊なり。學者にして通弊の一を有せば、學術の蘊奥を究め、眞理の發見を遂ぐることに既に難し。況や數弊を併せて之を有するに於てをや。今の學界に於ける殷憂は、學者の才非く學淺きに在らず、學者の博識多才にして人格具はらざるに在り。

人格陶冶の道固より一にして足らず、學者説く所も亦相同じからず。而も其尤も功效あるは、蓋剛健の氣と誠實の心とを養成するに在り。

第一 剛健の氣

余は剛健を分ちて勇敢、堅忍、克己、虚懷の四目と爲さむと欲す。

甲、勇敢。勇敢とは、僻説を固守するの謂に非ざるなり。驕傲人を凌ぐの謂に非ざるなり。勇敢とは眞理の所在に向ひて勇往敢進するを謂ふなり。學者眞理を愛重し、萬難を排して之を討究す。故に富貴も之を淫する能はず、貧賤も之を移す能はず、威武も之を屈する能はず。唯夫れ此の如くにして乃ち中流の砥柱と爲るを得、此の如くにして始めて霧海の南針と爲るを得。學者の尊重す可きは實に此に存す。Giordano Bruno が地動説を固守して火刑を辭せざりしは、眞理を愛すればなり。Max v. Pettenkofer が身を以て虎列拉病源の實驗に供したるは、學術を重ずればなり。Pettenkofer の説は固より議す可きもの多し。而も其志の學に篤きは、以て後進の儀範となすに足るものあり。吾常に好みて其言を誦して其志を壯とす。其言に曰く、

Gesundheit und Leben sind, wie ich schon oft gesagt habe, allerdings sehr hohe irdische Güter, aber doch nicht die höchsten für den Menschen. Der mensch,

der höher stehen will, als das Tier, muss bereit sein, auch Leben und Gesundheit für höhere ideale Güter zu opfern.

過を知りて改むるに憚るなきは眞理に達するの捷徑なり。唯勇敢の士之を能くす。學者自説の謬を知るの明なく、固く執持して改めざるは、猶之を恕す可し。既に其謬を知りて肯て改めず、又人の過を告ぐるを懼りて之を疾視するに至ては、決して宥す可きに非ず。何となれば是の如き陋劣の輩は、獨り己を損するのみならず、又人を害すること少からざればなり。子路は過を聞きて喜び、荀卿は我を非として當る者は吾師なりと云へり。年少學に志す者、三思を致す可きなり。

乙、堅忍。古より碩學鴻儒が偉大なる發見を遂げ、不朽の功業を建て、國家に裨益し社會に嘉惠したるは、固より天賦の才分に因ると雖も、而も與りて尤も力あるは、其堅忍不拔の意志に外ならず。夫の薄志弱行の徒は、常に難きを避けて易きに就き、僥倖を希ひて成功を徼む。故に才智ありと雖も、稍

や艱險に遭へば輒ち素志を抛ち、技能多しと雖も、僅に地位を得れば忽ち舊業を廢す。夫れ艱難を避け小成に安じ、而して眞理を發見し偉業を成就せむと欲するは、轅を北にして越に往くよりも難し。國家百年多才多能の人なかる可く、一日も堅忍不拔の士なかる可からず。

丙、克己。克己とは、自ら制して私慾に克ち、自ら律して放縱を禁ずるを謂ふ。人能く私慾に克ち放縱を禁じ、而して始めて人生の至寶たる自由を得す可し。何となれば自由の要求は必ず責任の負擔を生ずればなり。責任の負擔を自覺して學術を修習する者は、必ず其獨を慎む。唯其れ獨を慎む、故に監督者なしと雖も、放縱身を誤るの患なく、怠慢業に荒むの虞なし。

諸子牢記せよ、放縱は自由に非ず、怠慢は深讐たることを。Fichte 曰く、Die Faulheit ist die Quelle aller Laster. So viel als immer möglich zu genießen und so wenig als immer möglich zu tun, das ist die Aufgabe der verdorbenen Natur; und die mancherlei Versuche, welche gemacht werden, um sie zu lösen, sind die Laster derselben.

丁、虚懷。虚懷とは、私意を挾まずして人言を容れ、先入を主とせずして事物の真相を究むるを謂ふ。Francis Baconの授けたる *idola specus* (洞窟の偶像) の戒も亦之に屬す。

私意を挾まずして人言を容るるは、人格向上の要道なり。故に夏禹は皋陶が修身治國の説を聽きて、其言の昌なるを拜し、孔子は孔圉が好學下問の行を視て、其諡の當れるを稱したり。

先入を主とせずして、事物の真相を究むるは、眞理發見の捷徑なり。故に Claude Bernard は肝臓に於ける糖生成の研究に當り、一意事實を討尋し、古説に拘泥せず、遂に「グリコゲン」を發見せり。Lord Raileigh は空氣成分たる窒素と、窒素化合物より製出したる窒素と、其密度を異にせるを見、William Ramsay と俱に其密度の異なる所以を推究して、遂に「アルゴン」を發見せり。蓋科學の最高權威は研究なり、既定の學説に非ず。若し實驗の結果、學説に符せずむば、宜く其符せざる所以を研究すべし。唯其符せざる所以を究明

して、始めて眞理を發見するを得るなり。

學者懷を虚くして物を容るゝの量なくむば、常に人格の向上を望み難きのみならず、安ぞ能く眞理を發見して國家社會に裨益せむや。Haxley 曰く、

Sit down before fact as a little child, be prepared to give up every preconceived notion, follow humbly whenever and to what so ever abysses nature leads, or you shall learn nothing. I have only begun to learn content and peace of mind since I resolved, at all risks, to do this.

第二 誠實の心

誠實の心ある者は、己を持すること正直、人に接すること懇篤、事物を處すること精確なり。

己を持すること正直なり。故に己の長ずる所、人知らずと雖も之を慍らず。己の短なる所、人知ると雖も之を掩はず。言へば則必ず之を行ひ、約すれば則必ず之を踐み、言行一致し、期約違はず。是を以て親疎其言を信じ、貴

賤其行を重ず。其言信ぜられ、其行重ぜられて、而して其志遂げざる者は蓋鮮し。荀卿曰く、君子養心、莫善於誠。致誠則無佗事矣と。

人に接すること懇篤なり。故に利あれば與に之を分ち、害あれば爲に之を除き、人の美德は務めて之を揚げ、人の過失は務めて之を戒む。斯の如くして人と交る、人孰か我を敬愛せざらむ。人我相敬愛して友情乃ち全し。友情全くして切磋の益、協襄の功乃ち興る。學術を修むる者は、切磋に由りて蘊奥を究むるを得、事業を營む者は、協襄に頼りて進展を致すを得。夫れ學術を修むる者皆蘊奥を究め、事業を營む者皆進展を致し、而して文運の興らず、國勢の振はざるものは、古より未だ之あらざるなり。余故に謂らく、國民の懇篤なるは、國家隆昌の徵なりと。

精確は學者事物を研究するの要件なり。今例を科學者に取りて其由を示さむ。

科學に於ける眞理探究の方法は、觀察實驗の二者より重きは莫し。而も

二者の效力あるは、施行の精確にして常に對照實驗を伴ふを以てなり。

科學者事物を觀察して、能く其眞相を得るは、觀察を精確にすると共に、事物に兩面あるを知り、精確に之を審査するに由る。如し唯事物の一面を觀察して以て足れりと爲さば、縱令其觀察は精確を極むるも、群盲象を摸るの弊竇に入らざる者幾ど希なり。

實驗も亦必ず精確なるを要し、且對照實驗を少く可からざること多言を待たず。實驗に據りて觀察の結果を説明し、並に假設考案の當否を判定するに當り、如し對照實驗に缺略あらば、假令實驗の施行に間然なきも、往往不慮の過謬に陷る。例へば或化合物に電氣を通じて分解の起るを見、而して該化合物が電氣を通ぜずして分解するや否やを驗せず、直に電氣を以て該化合物の分解を誘起するものと爲さば、分解の眞相を失却するの大過なしとせず。或新藥の效力を驗勘するに方り、偏に之を用ひて治愈したる例のみを挙げ、乃ち之を用ひずして治愈したる例、及之を用ひて治愈せざりし例

を顧みざらむか、該藥效力の誤認は、殆ど免れざる所に在らむ。

Claude Bernard 曰く、*Pour cela, il faut faire l'expérience contradictoire, car il ne suffit pas de prouver qu'une chose existe, dans certaines circonstances ; il faut encore prouver que, dans des conditions opposées, le contraire a lieu.*

上來述べたる所に由りて之を考ふれば、人格の陶冶と學術の研究とは、洵に密切の關繫あり。人如し剛健の氣、誠實の心なくむば、啻に人格の向上を期するを得ざるのみならず、亦學術の蘊奥を究むる能はず。蓋人格は學術の進歩に因りて向上し、學術は人格の向上に因りて進歩す。學術を離れて人格なく、人格を離れて學術なし。乃ち知る偉大なる研究家は、必ず偉大なる人格者なることを。

諸子。眞理は之を愛する者の爲に保藏せらる。眞理の寶庫は、剛健誠實の管鑰に非ざれば之を啓くを得ず。余は切望す諸子が此管鑰を鑄造することを。諸子幸に努力せよ。

大正十一年宣誓式告辭

予は大正八年舉行の新入學生宣誓式に於て、新入學生は將來偉大なる學術研究家たるを期すべきことを切望し、同九年の宣誓式に於て、偉大なる研究家は必ず偉大なる人格者たることを詳説し、同十年の宣誓式に於て、學生は各自の攝生に注意し、疾病を避け、健康を保ちて、身神の活躍に便にすべきことを細論せり。本日は聊か學術研究の要件に言及して、諸子の省察に資せむとす。

一、研究の基礎と爲るべき智能を養成すへし

學術研究の基礎と爲るべき智識能力を養ふには、大約六端あり。讀書力の養成、聽講及實驗、推理力の養成、批判力の養成、識見の推廣、作文の練習是れなり。

甲、讀書力の養成。予は大正七年の新入學生宣誓式に於て、大學學生は

少くとも歐洲現代語たる英、佛、獨三國語の一に精通すべく、更に進て學術の蘊奥を究めむと欲するものは、更に他の二國語を併せ、尙ほ希臘、羅、匈等の古語をも兼習するの要あることを詳述せり。茲に讀書力養成の項目を以て諸子に切望する、亦此意に外ならず。但し歐語學習と同時に國語漢文の習熟を務むべきは、固より多言を須ひざるなり。

人或は云はむ、一國の語學已に容易ならず、數國の語を兼學して之に通ずるが如き、豈に尋常人力の及ぶ所ならむやと。是れ一を知りて二を知らざるの論のみ。凡そ人已に一國の語學に精通せむか、進て其他の語學を習得せむこと至難の業にあらず。A. Koelliker が齡七旬を踰えて、西班牙語の必要を感じ、發憤學習して遂に之に精通し得たるの事實は、予の屢々引證せる所なり。小壯の士子、範を A. Koelliker に取らば、必需の國語を習得するに於て何かあらむ。

語學の要訣は他なし、良師を擇ぶと、練習を怠らざると是れのみ。夫れ一

日數十分の餘暇は、何人も之を得るに難からず。若し此數十分を語學の練習に利用し、務めて日就月將の功を積まば、其大成は期して待つべし。唯だ其未熟中に在ては一日も練習を怠らざるを要す。一日の怠廢は、往往旬月の進益を消亡す。諸子請ふ旃を勉めよ。

乙、聽講及實驗。世上往往講義錄を以て聽講に代ふるの學生あり。是れ實に思はざるの甚しきものなり。夫れ講義錄は、親しく講義を聽くを得ざる人の爲めに設けたる補救の一方にして、元來已むを得ざるの舉に過ぎず。今列し得る講筵に列せず、聽き得る講義を聽かずして、故らに已むを得ざるの補救方に倚賴するは、愚も亦甚しからずや。凡そ教官の講義は、概ね浩繁なる文獻の萃を抜き、要を提げ、既定學說の醇疵を辨へ、當否を斷ずると同時に、自家研鑽討究の結果を表明し、並に其結果に到達する徑路及方法を説示するものにして、其深長の意義、微妙の事理は、唯だ當面の觀聽に於て心得すべく、筆記の追讀に由りて模索すべきにあらず。殊に其親經實歷、慘澹

攻苦の情事、直に士子の肺腑を衝きて、其精神を鼓勵し、其志氣を激發するが如きは、到底講義録を讀むものの夢にだも見ることも能はざる所なり。蓋し講義の講義録に於けるは、猶ほ旅行談の旅行日記に於けるが如し。今旅行者の親經實歴を談ずるや、山河の形勢、民物の姿態、躍如として眼前に飛動し、人をして實境に臨み、實物に接するの感あらしむ。然るに其旅行日記を讀むや、假令其文詞如何に巧妙に、記述如何に詳細なるも、竟に旅行談を聞くが如き無限の感興を味ふ能はず。講義録も亦然り、其録する所、能く講義の全體を擧げて、一句を漏らさざるも、其觀感興起の效果に至ては、乃ち霄壤の懸隔なき能はず。況や教官の崇高偉大なる人格が、其聲容辭氣に溢れて、聽講者の品性を陶養し、徳業を薰就するの機微は、到底文書記録の及ぶ所にあらざるに於てをや。Goethe曰く、

Schreiben ist ein Missbrauch der Sprache, stilles für sich lesen ein trauriges Surrogat der Rede.

實驗實習の基礎智能を養ふに緊要なるは、殆ど自明の事に屬し、予の絮説に待つなきのみ。

丙、推理力の養成。推理力の養成に尤も適切なるは、數學の練習なること、諸人周知の事理にして、予も亦大正七年の新入學生宣誓式に於て、其委曲を悉くせり。諸子請ふ當日の告辭に就て、參照する所あれ。

丁、批判力の養成。教官の講義は、必ず細に之を咀嚼し、審に之を翫味し、其取るべからざるは之を吐き、其茹ふべきは之を嚙み、渾然消化して、自身の血肉と爲して、始めて眞意義あり、始めて眞價値あり。若し聞くが儘に之を筆し、之を記し、得るが儘に之を含み、之を吞まば、啻に勞多く益少きのみならず、往往養智の機能を傷ひ、獨逸詩家の嘲笑を招くを免れず。

Denn was man schwarz auf weiss besitzt, kann getrost nach Hause tragen.

古今の書を讀むも亦然り。書中説く所當否あり、見る所正邪あり、其の當否正邪を判別取舍することを知らず、徒らに博覽旁搜して、腹笥の豐滿を誇る

が如きは、斷じて學術研究の基礎を鞏固にする所以にあらず。此れ豈に學に志すものの尤も戒むべき所にあらずや。孟軻氏が盡信書、不如無書と極言せるも、正に此意に外ならず。予も亦嘗て權威信仰 *Autoritätsglauben* の尤も不可なる所以を痛論せり。凡そ如何なる碩學の學說と雖も、時に誤謬なきを保せず。如何なる大家の研究と雖も、間々缺陷あるを免れず。而も其碩學大家たるに於て何ぞ傷まむ。蓋し學說の誤謬、研究の缺陷は、眞理に達する徑路の曲折にして、唯だ能く之を匡正し、之を補墊して、始て眞理の發明を得るものとす。予故に謂へらく、學說の誤謬、研究の缺陷を察知するは、乃ち進學の一梯段なりと。畢竟學者の要は、務めて批判力を養ひ、之に因て前言行の當否得失を辨識するに在るのみ。

批判力は明確なる智識に因りて生じ、明確なる智識は自己の發明、先進の指誨、朋友の切磋に因りて成る。此三者、一を缺くも不可なり。諸子慎みて忽諸にすること勿れ。

戊、識見の推廣。學術愈進歩して、學科愈分立するは、當然の勢なり。此分科多岐の時に當り、一人にして數科の蘊奥を究むるは、固より心力の及ぶ所にあらず。故に醫學を修むるもの、其一分科たる泌尿科を專攻して、其專家と爲り、法學を修むるもの、其一分科たる破産法を專攻して、其專家と爲り、電氣工學を修むるもの、其一分科たる無線電話を專攻して、其專家と爲るが如きは、固より時宜に合ふの爲にして、寧ろ勸勵すべく、抑止すべからず。然れども初學者、未だ研究の基礎たるべき諸學科の修養を経ずして、初より心力を專攻の一學科に傾注するは、爲學の方を得たるものと謂ふべからず。夫れ基礎學科の素養は、專攻學科の地盤なり。地盤未だ固定せずして、直に專攻科に没頭するは、宛も沙上に樓閣を構ふるが如く、啻に大成の期し難きのみならず、動もすれば其身家を危害し、延て比隣に及ぶの虞あり。近時往々専門外の事物を知らざるを以て、篤學の衿と爲すものありと聞く。知て故らに知らずと稱するは、猶可なり、若し眞に知らずして之を衿らば、洵に誤

惑の甚しきものに屬す。由來固陋の見を執り、邪僻の説を爲し、己を誤り、人を惑はすの弊は、斯種の學者に於て尤も多く之を見る。痛く戒めざるべからむや。諸子は必須らく所屬學部定むる所の諸科目を學習し、更に餘力あらば、他學部の教官に親炙し、學生に交際して、自己の心胸を拓き、眼界を擴むるに努むべし。此れ實に諸子の識見を推廣して、研究の基礎を安定する所以にして、其の綜合大學に在るの便益も、亦茲に存す。

己、作文の練習。實驗の事理を陳ね、論定の意見を叙べて、有道の是正に就き、大方の批判を求めんと欲せば、文詞に由らざるへからず。若し文詞拙劣にして讀むに堪へず、或は文義澁苦にして通ずべからざれば、假令内容優秀にして、創見新意の貴重すべきあるも、廣く中外に流布して、國家社會に裨益するに由なし。顧ふに流麗、雄渾、老蒼、奇峭等の妙文は、殆ど天才の擅長に係り、固より常人の學びて得べき所にあらず。然れども實驗の事理、論定の意見を、簡潔明瞭に叙述するが如きは、何人にも其習得を望み得るを疑はず。

Du Bois Reymond が

Es ist nicht von jedem zu verlangen, dass er geistreich, fein, schwunghaft schreibe, dagegen ist von jedem zu verlangen, dass er in gutem Deutsch seine Meinung bündig, klar und kurz mitteile.

と云へるは、實に我心を獲たるの言なり。

作文練習の要訣は、多く先賢の佳文を讀むと、多く自己の文章を作るに在り。字句は必しも典雅なるを須ひず。着想は必しも奇警なるを要せず。文體は必しも一格に拘らず。口語體も可なり、文章體も亦可なり。要は措詞明確にして、布置序あるに在るのみ。

世人或は云ふ、學者の文は、其内容を論じ、其巧拙を問はずと。此言恐らくは事實に合はず。Walther Kausch は篤學の士にして、Johannes v. Mikulicz に師事す。嘗て自から其業績を録して、批正を Mikulicz に乞ふ。Mikulicz 一見、憮然として Kausch に還して曰く、行文惡劣、人をして戰慄せしむ。子且須ら

く先賢の佳文を取り之を熟讀すべし。Goetheの著固より好し、Pillrothの舊版外科總論更に好しと。見るべし獨逸諸大家、心を文章に用ふるの深く且篤きことを。而も猶ほ其巧拙を問はずと謂はむか。

二、學術を尊敬すべし

學術にあらざれば智識を啓發する能はず。學術にあらざれば眞理を闡明する能はず。民福を増進するも學術なり。國運を振興するも學術なり。社會の醇化、人類の向上、一として學術の力に頼らざるはなし。學術は、之を研究すること愈深ければ、愈其深遠なるを知り、之を應用すること益廣ければ、益其廣大なるを見る。是に於てか學者、學術を尊敬するの念、油然として起る。學記に云く、道尊。然後民知敬學と。August Weismann曰く、

..... und das ist das Beste, was Ihnen die Universität geben kann——nicht das eigentliche Spezialwissen, so notwendig und so unentbehrlich dasselbe auch ist, sondern die Ehrfurcht vor der Wissenschaft selbst als solcher, als

des Weges zur Erkenntnis, zu dem geistigen Ziele der Menschheit, dem sie sich mehr und mehr anzunähern bestrebt ist.

見るべし學術尊敬の要義は、東西古今其揆を一にすることを。予故に謂へらく、學術を理解せざれば、學術の尊敬すべきを知る能はず、學術を尊敬せざれば、學術の研究を完うする能はずと。

比來一種の諛辭を唱ふるものあり、曰く、學術にして國家社會に直接の裨益なきものは、研究するに足らずと。此れ偏に功利を重じ、學術を輕ずるものにして、畢竟學術を理解せざるの咎に坐す。抑も學術の本領は、眞理を討究して、之を闡明し應用するに在り。事苟も眞理の討究闡明に繫らば、其結果が直に國家社會を益すると否とに論なく、其尊ぶべく敬すべき所以は、固より已に存す。况や討究の結果は、早晚擴充應用を経て、竟に國利民福を増進するに至ること疑なきに於てをや。Faradayが聽講者に答へたる警句は、此種の謬妄を辨じて最も痛快なり。Faraday 龍動の Royal Institution に於け

る講演中、磁石を取り急に銅線の「コイル」に近づけて、弱き電流の線中に生ずるを示せり。講後一婦人あり、問ふて曰く、*But Prof. Faraday, even if the effect you explained is obtained, what is the use of it?* Faraday 答へし曰く、*Madam, will you tell me the use of a new born child?*

歐洲大戦以來、本邦に於ける學術の研究、著しき進境を呈し、諸學者業績の發表、層見續出、之を戦前に比すれば、殆ど隔世の感あり。然れども一利纔に興りて一弊之に隨ひ、學歷の高下、學位の有無は、直に學者就職の難易に影響し、苟も學位なきものは、有望有利の地位を得難きの勢を成せり。是に於て地位を争ふの學者、學位を求むるに急にして、或は未熟の業績を發表し、以て譏を識者に招き、或は杜撰の著述を公刊し、以て誤を後進に傳ふるもの、屈指に勝へず。且夫れ地位に汲汲たるもの、已に地位を得れば即ち學業を廢す。學位に役役たるもの、已に學位を得れば即ち研究を怠る。此れ全く學術を以て名利の鈎餌と爲すもの、其學術を侮辱すること、亦大ならずや。更に甚

しきは、學説を曲解して、世俗に阿附するものあり。事理を捏飾して、時好に投合するものあり。此れ啻に學術を侮辱するのみならず、其之を蠱毒するの罪、死に容れず。予故に謂へらく、學者、學術を尊敬せざるの弊は、獨り學界を賊するに止まらず、延て禍を國家社會に及ぼすものなりと。

教官諸君は將に諸子を指誨して、學術の眞價値を知らしめむとす。諸子も亦各自に學術の眞意義を討究して、其尊敬すべき所以を理解すべし。諸子幸に能く在學中、研究の基礎たる智能を養ひ、以て他日進て眞理を討究するの素地を備へ、又能く終始學術を尊敬して、須臾も怠荒することなくむば、其進修造詣、必ず量るべからざるものあらむ。

民福を増進するも諸子に在り。國運を振興するも諸子に在り。社會を醇化し、人類を向上するも諸子に在り。百般の事業、一として諸子の努力に待たざるはなし。諸子の前途は多望なり。諸子の任務は重大なり。毀譽諸子に於て何かあらむ。富貴諸子に於て何かあらむ。奮闘せよ學術の爲

め。邁進せよ眞理の爲め。鍛錬せよ強健なる體軀。養成せよ堅固なる精神。

大正十二年宣誓式告辭

予は昨年舉行の宣誓式に於て、新入學生に告ぐるに、學術研究の要件たる基礎智能の養成、及び學術尊敬の二要義を以てせり。所謂學術尊敬とは、學術を尊重して人生の至上に置き、眞理を愛好して畢生の至樂と爲し、卿相の高位、億萬の巨富を以てするも、彼を以て此に易へざるの義に外ならず。學者唯此氣概あり、乃ち千辛を嘗め、萬苦を凌ぎて、學術の蘊奥を究盡す可く、唯此操守あり、始めて富貴に淫せず、威武に屈せずして、未發の眞理を闡明す可し。若し此氣概操守にして缺くる所あらむか、學者に在ては必ず志業の大成を妨げ、學界に在ては必ず學術の進運を害し、甚しきは一代の風氣を壞敗して國家社會を蠱毒するに至る。熟ら學界各種の流弊を察するに、殆ど弊源を此間に發せざるは莫し。今其最も大なる者を舉げて諸子の猛省に資せむとす。

一、權威信仰の弊。先進の權威を過信し、現存の學說に盲從して、別に知見の生面を開くの念なきは、大に獨創發明力の發揮を妨ぐ可きこと、前次の宣誓式に於て予の屢ば言及したる所なり。顧ふに權威の信仰は、即ち先進の權威を學術以上の尊位に置く者にして、其學術を輕侮し、眞理を藐視する所以は多言を待ちて知らず。凡そ眞理の闡明に二途あり。已知の事實、現定の學理を離れ、別に斬新の事理を發明するは其一にして、已知の事實、現定の學理を檢覈し、其誤謬缺陷を補正するは其二なり。二者徑路を殊にすと雖も、均しく眞理の闡明に歸趣して、學術の進運を推輓するは則ち一なり。今乃ち已知の事實に至上の權威を捧げ、現定の學理に絶對の盲從を守り、曾て誤謬缺陷の有無を問はざるは、獨り自己の發明力を沮害するのみならず、同時に學術發展の進路を塞ぐ者に非ずして何ぞや。諸子須らく知るべし學術上の權威は、已知の事實、現定の學理に在らずして、人人日新の研究に在ることを。若し研究の結果、已知の事實、現定の學理に符合せざるを發見せ

ば、更に進みて其符合せざる所以を研究す可し。研し來り究め去りて、復た餘蘊なきに至らば、自然に事物の眞相に透徹せむ。諸子旃を勉めよ。

二、學科及問題の選擇を誤るの弊。初學者應修の學科を選ぶに當り、

第一に考慮す可き所は、所選の學科が自己の資質に適するや否やに在り。

若し自己の資質に適せざるを知らば、速に之を改めて資質に適する者を取る可し。然らざれば、勞多くして功少く、終生努力するも、大成を期する能はず。世上往往時勢に眩惑し、自己の資質を顧慮せずして、不利の學科を選定する者あり。例へば、電氣事業の勃興に當りては、電氣工學を選び、機械工業の繁榮に際しては、機械工學を選び、化學應用の流行を聞けば、化學を選び、醫業の殷賑を見れば、醫學を選び、英文の盛行に遇へば、英文學を選ぶが如く、其法律政治經濟等の學科に於けるも亦此くの如し。而して電氣、機械、化學等に必需なる數學、物理の才能、文學、政法諸學に必要な語學の天分の如きは、漠然として顧慮する所なく、一意時勢に迎合して功名の急就を夢想する者、

比比皆是れなり。斯輩や、學業の大成を見ること固より難く、功名の急就を得ること亦易からず。轉軻不遇の極、窮途に悶死するに至らざれば幸なり。Justus Liebig は化學の天才にして、其不朽の偉業は長へに天壤に存し、中外の學者均しく其恩澤に浴す。唯其資質、當時盛行の古典語に適せず。其中學に在るや、終始全級の末席を離るる能はず。一旦去りて化學の門に入るより、頓に長足の進歩を形はし、遂に曠世の碩學と成れり。W. H. Hofmann の叙述せる行狀中左の一節あり。諸子の爲めに一誦せむ。

Die Familienchronik berichtet, dass er eine bedenkliche Vorliebe für den letzten Platz auf der letzten Bank gezeigt habe. Liebig pflegte indessen zu erzählen, dass ihm dieser Platz von einem der Mitschüler, Wilhelm Reuling genannt, mit Hartnäckigkeit streitig gemacht worden ist.

向きに Liebig をして時勢に迎合して成功を古典語學に期せしめむか、即ち畢生の心力を竭くして中材庸士に肩隨するを求むるも、猶其得可からざる

を恐る。夫れ希世の天才、不群の異能を有する斯人の如くにして、且斯の如き恐れあり。況や斯天才異能を有せざるの人に於てをや。

初學者又一時の好奇心に驅られて資質に適せざる學科を選ぶ者あり。其徒に精力を浪費して、學業功名兩ながら成るなきに終るは前者に同じ。研究者其問題を選ぶに當りても、亦往往此種の過誤に陥るを見る。凡そ此種の學者は、目前の功名若くは一時の好奇心を學術眞理の右に置く者にして、其學業功名兩ながら成らざるは、即ち學術を輕侮し、眞理を藐視するの結果に外ならず。John Hays Hammond が技術者に與へたる左の警告は、取りて年少學者の鑒戒と爲す可し。

Before deciding on the profession of engineering for his life-work, a man should make a thorough self-examination to make sure that his bent and abilities are not in another direction. Many young men have gone into engineering because of a superficial fondness for adventure, a desire "to get rich quick," a boyish interest

in machinery, who have had few of the necessary natural qualities to make them successful in the profession. By doing this they have closed to themselves the other vocations in which they might have done valuable work had they taken the time to analyze their real fitness.

三、研究放棄の弊。學海は茫洋として津涯なく、學理は深遠にして窮極なし。初學之を見て自己心力の及ぶ所に非ずと爲し、意氣沮喪して遂に研究を廢する者少からず。此れ亦學術の尊重篤からず、真理の愛好深からざるの過に坐するなり。苟も尊重愛好に餘念なくむば、更に何の暇ありてか心力の過不及を問はむ。且假に自己の心力、前賢先哲に及ばすとすも、常に全心全力を舉げて事に従はば、進修日に積み、造詣日に深く、早晚必ず成績の觀る可き者あるに至らむ。之を前賢先哲の功績に比するに、或は大小多寡の差等あらむも、其學術を促進し、學界に嘉惠する所以は則ち一なり。孔子曰く、力不足者中道而廢。今汝畫。又曰く、譬如爲山。未成一簣。止吾止

也。譬如平地。雖覆一簣。進吾往也と。古人我を欺かずと謂ふ可し。

學者又皮相の見を以て、學術に研究の餘地なしと誤想し、遂に研究を怠る者あり。此れ亦尊重愛好の徹底せざるに起因す。苟も尊重愛好して之を求めむか、所修の部門、之く所として研究の餘地ならざるはなく、敏達精強の學者畢生の心力を注ぐも、猶研究し盡す能はざる者あらむ。Claude Bernard曰く、

On ne peut pas jamais arriver qu'à éclairer partiellement un ordre de phénomènes ; mais il y a toujours à côté des questions plus ou moins connexes qui restent encore obscures. Si tout était éclairé d'un coup, la science serait fini ; cela ne sera jamais, et chaque question résolue laisse toujours à côté d'elle des questions nouvelles à résoudre.

學者又初より驚天動地の偉業を夢想して、漫に雄大なる問題を求め、偶ま好個の題材に逢ふも、輒ち一顧の價なき小問題として之を放棄し、終生一事

を發明せずして止む者あり。顧ふに學者にして學術を尊重し、眞理を愛好するの至情あらむか、微小の問題と雖も、何ぞ之を放棄するに忍びむや。若し精研深究して必ず眞理に透徹し、小を積みて大と爲し、腋を集めて裘と成さば、其學界に寄與し文運に貢獻する所、決して鮮小に非ず。況や眞理に大小の別なく、研究に輕重の分なきに於てをや。畢竟斯輩の尊重する所は、聞達に在りて學術に在らず。其愛好する所は、功名に在りて眞理に在らず。其終生齷齪として他人の糟粕を嘗め、遂に何の得る所なくして止むも、亦豈偶然ならむや。

學者又越趨逡巡して研究の實行を遲疑する者あり。顧ふに研究の開始に當りて、其方法順序を熟慮す可きは、固より論を須たず。又熟慮して開始するも、猶時に過失なきを保せず。而も過失を知りて歩趣を改め、且其由りて來る所を研究せば、失敗の經驗は、適ま以て成功の階梯と爲すに足らむ。此れ前賢先哲の實歴に於て屢見る所なり。若し徒に萬全を期して研究の

好機を逸せば、其結果往往研究の放棄と大差なきに至る。豈に戒めざる可けむや。易に云く需者事之賊也。孔子曰く、學如不及。猶恐失之。荀卿曰く、吾嘗終日而思之矣。不如須臾之所學也。諸子幸に此義を翫索せよ。

四、自由不悛の弊。我見を固執して人言を容れず、過失を遂行して悛改を憚る、學業の進修を沮害すること、蓋是より甚しきは莫し。予は大正九年の宣誓式告辭に於て痛く其弊竇を指摘せり。故に今再び絮說せず。唯茲に一言す可きは、此弊も亦學術尊敬の實心なきに起因すること是れなり。切に諸子の彼此參照して心得する所あらむことを望む。

五、不正競争の弊。長所を同する者同時に生存し、同一の學科を攻修し、同一の問題を研究し、同一の社會に活動すれば、相互の間、必ず雄長の争を生ず。是れ自然の情勢にして、人力の得て抑止する所に非ず。之を學界の自由競争と謂ふ。自由競争は、啻に學術の進運を沮害せざるのみならず、反て之を促進するの益あり。寧ろ獎勵す可きも、斷じて抑制す可きに非ず。然

れども不正競争に至ては則ち然らず。不正競争とは不正の手段を用ひて、或は同學者の研究を阻止し、若くは之を妨害し、或は同學者の業績を誹謗し、若くは其名譽を毀傷し、以て其地位聲望をして己の右に出でざらしむるを謂ふ。其心事の陋劣、用意の陰險、士君子の與に齒するを耻づる所なり。而も此弊逐年進むありて退くなきは、浩歎に勝へず。夫れ不正競争は、獨り同學者の學業を沮害するのみならず、併せて自己の學業を沮害するを免れず。要するに是れ一己の私心の爲めに、自他の學業を犠牲にする者に屬し、啻に學術を輕侮するのみならず、更に之を蠱毒するの罪、亦甚だ輕からざる者あり。年少學に志す者慎まざる可けむや。

六、賣名盜利の弊。世の名利に汲汲たる學者、往往未熟の業績を發表して、識者の矚目を招く者あり。更に巧黠にして、機智あるの徒、或は實驗の結果を粉飾して、虚妄の業績を公表し、或は已驗の事實と詐稱して、未驗の空言を宣傳し、内以て心を欺き、外以て人を欺く者あり。其記述精細、理路井然、一

點の疵議す可きなきに似たるを以て、往往盛名を一時に博し、居然として學界の大家と稱せらるる者も少からず。此種の學者は、偏に名利の營求に腐心し、曾て學術の消長、眞理の得失を顧慮せず。其陋劣なる心事は、不正競争の醜類に過ぎ、學術を蠱賊するの罪も、亦更に重く且大なる者あり。苟卿曰く、盜名不如盜貨と。眞に斯輩に加ふ可き頂門の一針と謂ふ可し。

更に賤む可く惡む可きは、自己の地位聲望を利用して、或は無効の藥劑を發售し、或は無價の鑛山を保薦し、或は矯激の言論を提唱し、或は淫蕩の文詞を公行し、以て不當の盛名、不正の巨利を博する者是なり。早晚水落ち石出で、醜陋の馬脚を露はす可きも、巨萬の財貨は已に聚めて其囊中に在り。此れ乃ち名を盜み兼ねて貨を盜む者にして、學術を侮辱し眞理を蔑如するの弊、此に至りて極まる。年少學に志す者、尤も深く戒めざる可けむや。

學者動もすれば世人の學術に無理解にして、學者を冷遇するを憤り、篤信好學の士風、爲めに漸く衰退するを歎ずる者あり。予を以て之を觀るに、世

人固より罪あれども、學者も亦罪なしとせず。若し學者にして上列の一弊を有せむか、其人已に敬愛の價値を失ふ。況や數弊を併せて之を有する者をや。孟軻曰く、人必自侮。然後人侮之と。學者の敬愛を失ふは、必ず之を失ふの理由あり。學者の冷遇を受くるも、亦之を受くるの理由あり。苟も理由ありて然らば、何ぞ世人を咎むるを得むや。若し乃ち學者に一失の議す可きなく、學界に一弊の指す可きなきに、敢て之を輕侮し之を冷遇するは、是れ痴人ならざれば則ち狂者なり。若し一世皆然らば、是れ濁世の狂瀾なり。狂瀾を挽回し、濁世を澄清するは、即ち學者の任なり。之を中流の砥柱と謂ふ。之を學界の棟梁と謂ふ。之を國家の柱石と謂ふ。

本學學生は人生至上の學術を攻究し、他日學界の棟梁となり國家の柱石と爲る可き大任を負ふこと、予の累次聲明したる所なり。諸氏各任務の大なるを自覺して、心力を學術の尊敬に注ぎ、以て志業の大成を期せざる可けむや。

Eduard Meyer 曰く、

Die Wissenschaft ist eine strenge Herrin : sie erschliesst sich nur dem, der mit Einsetzung aller Kraft um sie ringt und sich ganz ihr hingibt.

諸子請ふ自重努力せよ。

大正十三年宣誓式告辭

七六

本學は從來設置せる法、醫、工、文、理、經濟、六學部の外に農學部を増設し、本年度より其授業を開始せり。是に於て綜合大學の形式略ぼ備はり、將に進て其内容を充實し、以て綜合大學の實を擧げむとす。顧ふに綜合大學の實を擧げむには、學學の同人が綜合大學の特長を明にして、其發揮及利用に努めむことを要す。茲に其綱要を提げて諸子に示さむ。

第一 綜合大學の特長

綜合大學の特長は、各學部の聯絡通融に因りて、意見を交換し、知識を互益し、交々相協助し、交々相激勵して、學術の研修及品性の陶冶に多大の便益を與ふるに在り。

一、知識の協助。學術の進歩愈大なれば學科の分立愈繁し。而も各學科の間自から知識の共通ありて、自他の協助を必要とする者少しとせず。

即ち自然科學に屬する物理、化學、生物、地質、礦物等の諸學科が、其内容に於て交互に聯貫するは固より論なく、他の工學、醫學の如きも、亦以上の諸學科と緊切なる關繫あり。蓋工學の本領は、主として機械、電氣、化學、建造等の作用を社會人類の爲め有利に應用するに存す。故に工學者は物理、化學、地質、礦物等の諸學の基礎知識を缺少するを得ず。醫學の目的は、人體の構造、組織、官能を知悉し、疾病に因り生ずる其變化を討究し、並に疾病の原因を明にして、或は之を未發に防ぎ、或は之に對する適當の治法を工夫するに在り。故に醫學者も亦物理、化學、生物、礦物等の諸學の豫備知識を具備するを要す。農學、林學の研修に物理、化學、生物、地質、礦物諸學の基礎知識を要し、其事業の遂行に機械工學、電氣工學、土木工學等の協助を需つは殆ど絮説を須ひず。殊に數學は吾人の認識せる論理的作用を正確に表現する者なるを以て、如何なる學科と雖も一として數學の協助を仰がざるは無し。更に語學が各學各科に共通せる緊要の協助學科たることは、大正七年及十一年の宣誓式

七七

に於て已に詳述したれば、今復た贅せず。

精神科學に屬する諸學に在ても亦然り。就中哲學は宇宙の深秘を闡發し、人生の新知識を開導するを本領とするを以て、如何なる學科も茲に根柢を置かざるは莫し。又學者事理を考察し是非を論定するには、須臾も論理學の協助を離るるを得ず。而も哲學論理學の研修も亦他の精神科學及自然科學の基礎知識を缺少するを得ざるなり。

又學術の性質上、一見何等の交渉なきに似て、實際緊切に關聯する者あり。例へば生理學が言語學、哲學、教育學等の研究を裨益するが如き、解剖學が考古學、美學、人類學等の研究を協助するが如き、言語學、考古學及人類學が史學の研究に嘉惠するが如き、法律學、經濟學及衛生學が工學の研究に須要なるが如き、是れ其較著なる者なり。

各科學術の相關聯して知識の協助を必要とすること既に此くの如し。而して其協助す可き各學科を並設して融會貫通の便宜を備ふるは、唯綜合

大學に於て之を見る。且夫れ學術の研修は、專一にして深厚なるを尙び、膚淺にして廣汎なるを尙ばず。而も一般學術の全體を達觀して偏僻固陋の失を避くるは、學者の尤も心を用ふ可き所なり。然るに學科の分立漸く多岐なるより、一科の專攻に没頭するの學者、往往此要義を忽忘し、唯自己專攻の學科あるを知りて、他の重要なる學科あるを知らず。夜郎自大、遂に深遠なる研修を怠るに至る者あり。此豈に大に戒めざる可けむや。V. E. H. Becker が獨逸學界に於ける専門分科の弊害を痛歎したるは、殊に傾聽の値あり。其言に云く、

Wir erzogen Ohren-, Nasen- und Hautspezialisten, aber keine Ärzte; die germanistischen, romanistischen und sonstigen Philologen beherrschten virtuos die Lautverschiebungen und zählten alle Hebungen und Senkungen in der Dichtkunst; aber ein lebendiges Bild der Kulturzusammenhänge ihres Fachgebietes besaßen im günstigsten Falle die klassischen Philologen. Wir erzogen

Heiztechniker und Schiffsmaschinenbauer, aber keine Ingenieure; wir erzogen keine wissenschaftlichen Vollmenschchen und ganz gewiss keine Staatsbürger.

一二研修の激勵。余少時 Justus Liebig の自叙傳を讀み、當年「ギーセン」大學の化學科教室に於ける研究の狀況、並に各研究者間に於ける交互激勵の深甚なるを見て、獨逸學術の振興洵に偶然ならざるを知れり。其一節に云く、

..... ich gab die Aufgaben und überwachte die Ausführung; wie die Radien eines Kreises hatten alle einen gemeinsamen Mittelpunkt. Eine Anleitung gab es nicht; ich empfing von jedem einzelnen jeden Morgen einen Bericht über das, was er am vorhergehenden Tage getan hatte, sowie über das, was er vorhatte; ich stimmte bei oder machte meine Einwendung; jeder war genötigt, seinen eigenen Weg stets zu suchen. In dem Zusammenleben und dem steten Verkehr, und indem jeder teilnahm an den Arbeiten aller, lernte jeder von dem anderen.

尋て先師 Hoppe-Seyler 先生に従ひ學ぶに及び、Liebig の所述を如實に體認するを得たり。當時先生の教室に在る各研究生は、自己の選定し、若くは先生の授與せる問題に就て、各自研究の歩武を進め、其一進一得は他の同室研究生に多大の感興を與へ、苟も疑義あれば進で與に論究し、闕謬あれば輒ち爲に指摘し、先生又之に参加して批判を下し指導を與へ、以て疑問を解決し、進路を開展するを常とせり。夫れ一教室内に在ても、交互の激勵が研究の進展に裨益すること猶此くの如し。況や碩學俊才の淵藪たる諸學部を具有する綜合大學に於てをや。獨逸大學に於ては法律學、經濟學、哲學、史學等の精神科學にも、夙に「ゼミナル」を組織し、各研究者は其成績を擧げて先進及朋輩の批判を求め、之に因りて交互に激勵を與へ、交互に進益を促がすこと、自然科學の實驗室に譲らず。此風や、米國大學に於ても往往其盛行を見、我邦大學に於ても漸次其勃興を認む。夫れ鐵は相磨するに因りて熱を生じ、熱高度に達すれば能く火を發す。凡そ研究を促進して之を完成するは、唯

熱に之れ由る。古來有益にして偉大なる發明は、一として熱ある研究家の賜ならざるは無し。

激勵の效果は、獨り當面の研究を促進するのみならず、往往研究者をして進修の途轍を轉じて、尤も天稟に適合せる學科に就かしめ、遂に偉大なる人物を造就するに至ることあり。Theodor Mommsen は本と法律學の教授たり。拉甸金石文の討究が羅馬法の研修に須要なるを認め、伊太利に赴きて其討究に没頭し、遂に優異なる史學の大家と成れり。此専門の改移は、職として其先輩 Savigny 學友 Otto Jahn 及 Henzen 等の與へたる激勵に由れりと云ふ。又 Hermann von Helmholtz は初め醫學を修め「ケーニヒスベルヒ」「ボン」「ハイデルベルヒ」等の大學教授に歴任し、主として生理學の授業を擔當せり。其間英の物理學者 William Thomson「ハイデルベルヒ」の同僚 Kirchhoff, Bunsen 等と親しく交り、其切磋に因りて物理學に深造し、遂に Magnus の後を承けて柏林大學に於ける物理學の教授に任じ、絶大なる業績を成就するに至れり。

此固より Helmholtz の數學、物理學に適する卓異の天才に由ると雖も、之をして物理學の專攻に移らしめたるは、僚友の激勵與りて尤も力ありしなり。

三、品性の陶冶。世に才徳周全の人なし。故に性行に一長一短あるは各人の免れざる所なり。唯能く長を資り短を補ひ、乃ち品性の向上を見る。然りと雖も人の短を見るは易く、己の短を知るは難し。己の短を知り人の長を資りて之を補ふは更に難し。此乃ち明師に親炙し良友に接觸するの必要由て生ずる所なり。蓋人の才徳己に優越するを見るは、己の性行人に及ばざるを知るの始端なり。己の性行人に及ばざるを知るは、人の長を資りて己の短を補ふの首途なり。是を之れ自省批判の工夫と謂ふ。自省批判の工夫は、務めて多くの賢徳に親しみ、務めて多くの俊彦に交るに因りて其純熟を見る。蓋觀感の機會愈多ければ反省の工夫愈深ければなり。此亦綜合大學の一特長に非ずして何ぞや。學記に云く。

大學之法。禁於未發之謂豫。當其可之謂時。不陵節而施之謂孫。

相觀而善之謂摩。此四者。教之所由興也。

第二 特長の發揮及利用

上述の三長、能く之を發揮して利用せば、獨り學生在學の間に於て進徳修業に多大の效益を見るのみならず、即ち業を卒へ學を出て、各處に分散して各般の業務に就くに至るも、一旦聯結したる親交睦誼は復た斷絶せざる可く、機會ある毎に重ねて交互の協助と爲り、激勵と爲り、切磋琢磨の伴侶と爲り、各自の目的を助成して其成功を完うせしむ可し。

特長の發揮利用には、講座を増設し設備を整頓するの要なしとせず。又各學部の畛域を撤去して學習研究の自由を擴張するも、亦緊要なる計圖たらずとせず。而も現下經費に限あり、遽に理想を實現し難きは、竊に以て遺憾とする所なり。然りと雖も知識の協助、研修の激勵は、師弟團樂談笑嬉遊の間に於て多大の効果を收め得べく、殊に品性の陶冶の如き、尤も其然るを見る。此點に於ては本學已設の機關あり。而して之に因りて特長を發

揮し利用するには、又各人の用意を要す。

一、機關

本學に金曜講演會、學術懇話會等の設あり。金曜講演會は、

學術の普及を圖り、人格の修養に資するを目的とし、各學部の教官隨意に題材を擇びて通俗に講演する者とす。學術懇話會は、職員相互に學術上の知識を交換する者とす。又學生及職員を以て組織せる學友會あり。會員の身心を修養し、親睦を計り、意志を通融するを目的とし、弓道、馬術、劍道、柔道、庭球、野球等の陸上運動、操艇、游泳等の水上競技、及音樂、辯論等の演習を事業とす。以上の諸會は、要するに知識の協助、研修の激勵及品性の陶冶を共通の標的とし、師弟團樂嬉遊談笑の間に之を體得せしむるの機關に外ならず。

更に吾人は時機を見て教官學生の共同會食會を開き、以て舉學長少の睦誼を修敦せむと欲す。已設の學生集會所は元來此種計圖の實行を目的とする者なるも、規模編小にして設備周到ならず。又寄宿舎は學生の共同起居に供して其輯睦を完うする所以の者なるも、亦是れ狹隘不備にして、全學

生員の一小部分を容るるに過ぎざるを遺憾とす。而も此二者、早晚擴張整頓して本來の目的に適合せしめ、吾人の計圖を實現するの期あるを疑はず。

二、用意。特長の發揮利用は同人の和協輯睦を先務とし、同人の和協輯睦は各人の交讓互敬を要訣とす。此實に諸子の尤も意を用ふ可き所なり。交讓とは各自己の欲望を制して之を同人に推及するを謂ふ。即ち古人の所謂己に克ちて禮に復るの義に外ならず。犠牲の精神、責任の觀念は是より生じ、物に接するの禮儀、身を律するの節制も是より起り、人を容るるの雅量、自から守るの信義も是より發す。衆心を結合し睦誼を修敦する所以、孰れか是より切要なる者あらむや。

互敬とは各人互に人の名譽を重ざること己の名譽の如くするを謂ふ。夫れ人誰か己の名譽を重ぜざらむ。己の名譽既に重ざ可くむば、人の名譽も亦重ぜざる可からず。人人互に名譽を重じ、而して後其組織せる集團の名譽始めて全し。名譽を重ざる者は、必ず先づ剛健の氣を治め、誠實の心を

養ふを要す。唯其れ剛健の氣を治む、故に人の美を濟すに勇にして、己の過を改むるに吝ならず。正義の在る所は邁進敢行して、富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず。友道の命ずる所は險艱を避けず、勞煩を厭はず、必ず目的を達して而して後已む。唯其れ誠實の心を養ふ、故に人我一體、言行一致、規約を守り、然諾を重じ、一善を見れば汲汲として之を揚げ、一失に逢へば諄諄として之を戒め、以て其操行の虧くるなく、志業の成るあるを期圖す。誠に此くの如くにして和協輯睦の完からざる者は未だ之あらざるなり。

特長を發揮利用するの機關と其用意とは大略上述の如し。幸に學學一致力行して已むなくむば、綜合大學の實を擧ぐるの日期して待つ可し。本學既に綜合大學の實を擧げ、更に進で他の諸大學と相接觸し、與に共に知識を協助し、研修を激勵し、品性を陶冶せば、一般學界の流弊を洗除して質實剛健の美風を作興するに於て、蓋又甚大の效益あらむ歟。

茲に告辭を終るに當り、H. v. Helmholtz の語を引用し、以て如上の所述が

余一人の私言に非ざるを證せむ。

Diese Beziehung aller Forscher und aller Zweige des Wissens zu einander und zu ihrem gemeinsamen Ziele stets in lebendigem Zusammenwirken zu erhalten, das ist die grosse Aufgabe der Universitäten; darum ist es nötig, dass an ihnen die vier Fakultäten Hand in Hand gehen, und in diesem Sinne wollen wir uns bemühen, so weit es an uns ist, dieser grossen Aufgabe nachzustreben.

大正十四年宣誓式告辭

予は昨年の宣誓式に於て綜合大學の特長、及其發揮利用の機關用意、並に機關の不備に言及せり。本學は多年此種不備の補充に心力を注ぎ、近くは其一端として一大會堂の建設を企圖せしが、幸に文部當局の諒鑒と學内諸賢の努力とに賴りて、茲に此大講堂の落成を見、其開堂の劈頭に於て本年の入學者たる諸子の宣誓式を行ふことは、本學史上長へに録存すべき一好記念にして、此記念の核心たる諸子は、必ず綜合大學の特長を完全に利用して、他日學界の棟梁、國家の柱石たるの資地を確實に占得せざる可からず。諸子の責任は洵に重且大ならずや。

本學が諸子の教養に於て最も重ざる所は、學識の増殖と品性の陶冶とに在るや固より多言を俟たず。此二途に於て教官の訓迪、朋友の切磋と相待ちて至大の效益を著はす者は各自の讀書なり。又諸子が訓迪切瑳讀書の

效益を收むるに當りて、須臾も忽にす可からざるは時の利用なり。因て茲に讀書及時の利用を概説して諸子の参考に資せむとす。

第一 讀 書

夫れ書に長短良否あり、讀法にも亦得失利害あり。今讀書の要件として一、必讀の書。二、書の選擇。三、讀書の法の三項を擧げ、以て諸子の注意を促さむとす。

一、必讀の書。學生の必讀す可き書は概ね四類に歸す。

第一類 科 業 書

第二類 參 考 書

第三類 修 養 書

第四類 學 術 雜 誌

科業書とは、各自の專攻學科に關する成書及講録を謂ふ。參考書とは、専門全書、叢書、百科全書、及辭書の類を謂ふ。修養書とは、智徳の修養に效益多

き書籍を謂ふ。廣義に解釋すれば、如何なる書と雖も殆ど皆修養の效益ありと謂ふ可く、即ち稗史野乘の如きも時に修養の資と爲ることあり。然れども學生の必讀書として尤も尊重し尤も推奨す可きは、聖賢の遺書、偉人傑士の言行録等にして、就中各自の專攻科に屬する學界名家の自叙傳の如きは、啻に私淑尙友の鴻益あるのみならず、直に各自の學習研究に嘉惠するこゝと鮮小ならず。又心神を慰め性情を養ふ可き文學技藝の書も、亦修養書として必讀す可き價值あり。學術雜誌とは、各自の專攻科に屬する内外の學誌を謂ひ、殊に其登載する古今内外學者の研究業績は、尤も必讀す可き者とす。

以上四類の外、必しも全く讀む可きの書なしとせず。幸に必讀の書を読み尙餘力あらば、他の可讀の書に涉りて見聞を廣むるも妨げなし。然れども他書の耽讀に因りて必讀書の功程を減損するが如きは、深く自から戒めて之を避けざる可からず。

二、書の選擇。必讀書の各類中又讀む可き者と讀む可からざる者との別あり。例へば事理を曲解する者、曲解の事理を粉飾する者、僻見を主張する者、邪説を鼓吹する者の如き、殊に初學に在りて尤も讀む可からざる者とす。讀者其選擇を誤るときは、啻に勞して功なきのみならず、往往重大の過謬に陥る。慎まざる可けむや。

初學の人、各自の専攻科に屬する書を選むには、教官若くは前輩の選定を仰ぐを以て尤も安全なる捷徑とす。若し教官前輩の選定を仰ぎ難きとき、又は科業書以外の必讀書を自ら選むときは、宜しく古來識者に稱贊せられ、今尙聲價を失はざる者を取るべし。又専攻科に屬せざるも、智徳の修養に資す可き新刊書を選むには、前輩若くは朋友内の讀書家に就き、其愛讀する書名を問ふて之を取るを可とす。英國政治家中讀書の篤好者たる Edward Grey の如きも、新刊書を讀むには、親友内の讀書家に問ひ、其閱讀の價值ありと答ふる者を取りて之を讀めりと云ふ。

三、讀書の法。均しく必讀の書に屬するも、或は必ず細讀を要する者あり。或は通覽して可なる者あり。概して之を言へば、凡そ科業書、修養書、及各自の研究事項に關する諸家の業績等は必ず細讀を要す。就中碩學名家の傳記の如きは尤も精細に讀破し、以て立志の發端より學術功業の大成に至る徑路の曲折、用功苦心の實迹等を熟察するを要す。Goethe 云く、

Man studiere nicht das Mitgeborene, sondern grosse Menschen der Vorzeit, deren Werke seit Jahrtausenden gleichen Wert und gleiches Ansehen behalten haben. Ein wirklich hochbegabter Mensch wird das Bedürfnis dazu ohnedies in sich fühlen, und gerade dies Bedürfnis des Umgangs mit grossen Vorgängern ist das Zeichen einer höheren Anlage.

諸家の業績も亦斯の如く、必ず其全篇を細讀して初中後の曲折波瀾を精察するを要す。凡そ自然科學の研究に於ては、當初特定の問題を提げて研究に着手するも、爾後功程の進むに及び、或は到底豫期の結果を得ざるを發見

し、或は全く豫期に反したる結果を得、是に因りて他の重要なる発見の端を啓くこと往往之あり。 Claude Bernard が

Lorsqu'on se propose de résoudre expérimentalement une question, on doit s'attendre à tous les cas possible : il arrive quelquefois que l'expérience répond à la question ; souvent elle répond autre chose.

と警告したるは、誠に之が爲めなり。應に知るべし研究の徑路を察するの緊要は、幾ど其結果を観るの緊要に譲らざることを。

細讀に三法あり。

第一法 筆を以て讀む。

第二法 意圖を以て讀む。

第三法 反覆して讀む。

筆を以て讀むとは、讀書中會心の處に到り、又は重要な意義ある處に到れば、直に筆を取りて其行下若くは傍邊に劃線又は批點を附し、又書中の所述

が讀者の意見に合致せず、又は其意義若くは當否に疑問を生ずるときは、直に其意見若くは疑問を附記して後日の考究に備へ、又別冊を備へ置きて、書中の重要な章節を抄録し並に自己の感想若くは見解を割記する等の法を謂ふ。此法は宛も著者と對坐して議論を上下するの槩あり。獨り讀書の興味を増し、記憶の深固を加ふるのみならず、終始神志の緊張を催がし、智徳の進修に甚大の功益あり。

意圖を以て讀むとは、所讀の書に就て豫め或る疑問を起し、必ず之を解決せむとする意圖を以て其書に臨むを謂ふ。例へば論語孟子を讀むに當り、豫め孔丘孟軻は何如なる人なりや、又は論孟は何の書なりや、又は論孟の某章若くは某句は何の義なりやの疑問を起し、其解決を期圖して之を讀むの類なり。凡そ書の讀者に於けるや、問あれば答あり。問はざれば答へず。

恰も科學者が適當の方法を以て眞理を宇宙に問へば、宇宙は之に相當の解答を與ふるが如し。若し何の疑問もなく、何の意圖もなく、漫然と書に臨ま

ば、讀み了りて得る所は僅に漠然たる輪廓に止まり、書の内容實質に至ては何の得る所もある可からず。程頤云く、讀論語、有讀了全然無事者。又云く、今人不會讀書。如讀論語。未讀時、是此等人。讀了後、又只此等人。便是不曾讀と。意圖なくして書を讀む者も亦此類なり。

反覆して讀むとは數回乃至數十回を重ねて讀むを謂ふ。孔子の易を讀みて韋編三たび絶てるが如きは、此法の模範なり。反覆して讀むに二種の利益あり。凡そ章句簡單にして意義深遠なる者、篇章浩繁にして事理錯綜せる者等は、反覆熟讀して後始めて意義の貫通を得。朱熹が書貴熟讀。讀多自然曉と云へるは即ち此れを謂ふ。此れ解釋上の利益なり。又記憶し難き事物を記するの書、又は記憶を生命とする文書は、數回乃至數十回誦讀して記憶を更新し、遺忘を補足し、然る後始めて渾然たる自己の有と爲すを得。此れ記憶上の利益なり。以上の三法、或は其一を選用し、或は其二三を併用す。殊に必讀重要な書は、三法併用を以て最良の讀法とす。

第二 時の 利用

許多の學課を有する學生に望むに、許多の讀書を以てせば、論者或は其時なきを以て之を難ぜむ。而も毎日一二時間の餘裕は、時の分配に因りて何人も之を融通するに難からず。殊に學生には日曜祝日夏季冬季の休業日あり。若し巧に分配利用せば、科業の修習、運動競技、散策旅行、皆其時なきを患へず。況や讀書時の餘裕をや。

古來偉人傑士時の利用に因りて大業を成就し、時の分配に因りて百忙中に綽綽たる餘裕を生じたる者、枚舉に勝へず。伯禹は寸陰を惜みて治水分土の偉功を奏せり。Longfellowは朝餐前の十五分時を積みて Dante 神曲の大翻譯を完成せり。憤を發して食を忘れ、樂み以て憂を忘るゝ篤學の孔子に、沂に浴し、舞雩に風する餘裕あり。Edward Greyは英の外務に在り、政務蠟集の身を以て讀書釣魚の餘裕を存し、殊に鮭の發生蕃殖、鳥の名稱聲音を詳考して之に精通せり。GoetheはFaustに就て新想を得れば、接客中に在ても

直に辭して書齋に入り、其記述に従事するを常とせり。Alexander v. Humboldt は日中寸暇なく、早晨深夜に研究の功を積み、遂に浩瀚なる名著を成せり。Edward Bulwer Lyton は政治家、事業家、旅行家を兼ねたる多忙の人なりしに、毎日三時間を著作に充て、遂に數十巻の大著書を出だせり。日本野史の著者飯田黙叟は毎日主家に出仕し、毎夜父の晩酌に侍し、其餘暇を以て群籍を博覽して遂に其大著を成し、就中大日本史は、逐次二巻を借り、手寫し了りて之を返し、遂に全部を寫了せりと云ふ。應に見るべし時は分配の宜しきに因りて餘裕を生ず可く、此餘裕を積みて利用せば、以て心神を慰め性情を養ふに足り、以て大事を興し偉業を成すに足ることを。已に然らば時の浪費は一種の罪惡と謂ふ可く、自己に浪費するの罪已に小に非ず、他人をして浪費せしむるの罪は更に大なり。自己の浪費と同時に他人の浪費を致す者に至ては、尤も容す可からざる大罪と謂はざる可からず。

本學は正確なる時の標準を全學に示さむが爲に、新に精巧なる大時辰儀

を購求し、其到着を待ちて此大講堂の高塔に装置せむとす。望むらくは諸子、此時表を仰ぐ毎に慨然として時の分配利用に感奮し、其鐘聲を聞く毎に惕然として時を浪費する罪惡の恐る可きを猛省せよ。

諸子。一たび失ひたる富は勤儉に由りて再蓄す可し。一たび失ひたる知識は學習に由りて再得す可し。一たび失ひたる健康は攝養と醫藥とに由りて回復す可し。唯一たび失ひたる時は永久に之を失ひ、終生回收の期なきなり。貴き哉時の利用。重き哉時の分配。吾人の現在を醇化する。是より善きは莫く、吾人の將來を多幸にすることは、是より大なるは莫し。學術の進修は實に是に由る。品性の向上も亦實に是に由る。浪費する勿れ一分の時。諸子の前途は其中に存す。

Was du von der Minute ausgeschlagen,

Bringt keine Ewigkeit zurück.

大正十五年宣誓式告辭

一〇〇

本學の使命中尤も重要な者は、諸子を教養して國家社會に有用なる材たらしむるに在り。此使命を完うせむが爲に、本學が尤も心力を致すと同時に、諸子自身の奮勵を切望する所は、學科の學習、學術の研究、人格の修養、身體の鍛鍊、是れなり。今此四項に就て特に留意す可き諸點を挙げ、以て諸子の省察に資せむとす。

第一 學科の學習

學科の學習は聽講、讀書、演習、實驗(實習)等より成る。

聽講は學習の第一要素にして、學生たる者の必ず親聽す可きことは、余の屢痛言せる所なり。蓋教官の講述に於ける深長の意味、精微の義理は、唯親聽に由りて體得す可く、決して傳聞又は筆記の追讀に由りて摸索す可きに非ず。殊に其聲容辭氣に流露する教官の人格が聽講者の精神志氣に及ぼ

218932

す薰陶の偉大なる効果は、眞に親聽者獨得の鴻益たること、學生の忽忘す可からざる所なり。

讀書の學習に少く可からざるは、絮説を須ひず。學生必讀の書類、讀書の方法等は、余之を昨年宣誓式の告辭に詳述せり。切に望むらくは、諸子、讀書を以て聽講と表裏を相爲し、知見を拓き、志識を長じ、以て學習の効果を完うせむことを。

演習及實驗(實習)は、獨立して學術を研究し得るに至るの階梯なり。諸子が先賢の偉論、先進の苦心を體認するも、此に由り、學說の醇疵、成案の當否を辨識するも、此に由り、研究の順序、思索の方法も、此に由りて解し、對象事物の親熟も、此に由りて積み、器械物料の措置も、此に由りて熟す。乃ち諸子が獨立して學術を研究するの自覺は、此に於て始て生ずるなり。

凡そ所屬學科の科目を學習して尙餘力あらば、學部長の聽許を受けて、同時に所屬科外の科目を兼習するも可なり。又其餘力を以て、或は所屬科外

一〇一

の書類を閲讀し、或は運動競技旅行見學等に充用するも亦可なり。然れども之が爲に本學科の學習を曠缺し、若くは荒廢するに於ては、事態の善惡、意圖の良否に拘らず、均しく學生の本分に戻る。深く戒めざる可けむや。

第二 學術の研究

學術の研究は、學者の本領にして大學の生命なり。學術を研究せざる者は學者に非ず。學術の研究なき者は大學に非ず。

學術の研究に至要なるは誠意なり。誠意なき研究者は、研究の徑路をも且知る能はず、況や眞理の發見及其應用をや。

研究者、其發見せる事實が自己の假説に符合せざるに當り、往往其事實を捏改して、強て假説に傳會する者あり。是れ私見宣揚の僞情にして、眞理究明の誠意に非ず。夫れ假説固より失當なきを保せず。苟も其失當を發見せば、直に之を改正し、若くは之を拋棄して、事實を曲げざる歸結を明示せざる可からず。要は眞理の究明に在りて、私見の宣揚に在らず。

又妄に研究の速了を圖りて、未完不熟の業績を發表する者あり。是れ沽名釣利に急にして、眞理究明の誠意を缺く者なり。凡そ學術の研究は、尤も慎重周密なるを要す。慎重周密にするも猶過誤缺漏なきを保せず、況や急遽輕卒に之を結了するに於てをや。

又私心の所好に阿り、或は時世の風潮に溺れて、研究を事理の一面に偏向し、又は一派の學説を妄信して他派の辯難を顧みず、甚しきは未だ一家の原著をも閱せず、僅に其抄録を讀みて學説の全體を究め得たりと速了する者あり。研究に誠意なきこと、此に至りて極まる。凡そ事物には表裏あり、學説には醇疵あり。苟も研究の誠意あらば、宜しく各家の原著を熟讀し、各種の文獻を精査し、以て其表裏を察して是非を辨じ、其醇疵を判して正邪を明にすべし。斯の如くして始て大中至當の事理を發見するを得るなり。今一例を挙げむに、陽明學の研究に志す者は、陸象山、王陽明の全書と共に二程朱子等の諸説を歴覽し、其異同を剖斷し、原委を詳覈し、而して後始て格物致

知の根本義を知るを得可し。若し偏に陸王一派の書に據り、以て其學說の眞相を究めむとせば、竟に目的を達する能はず、況や後學餘流の撰述に據りて、僅に陽明の皮相を髣髴するに於てをや。自然科學の研究に於て對照試験の重要なるも、亦此理に基くなり。

次に學術の研究に重要なるは熱情なり。凡そ研究者一たび研究問題を定めたるときは、百難を排し萬苦を忍び、勇往邁進必ず目的を達せずむば已まざるの熱情なかる可からず。夫の艱苦に耐へず、半途にして研究を廢し、勞煩を厭ひて粗笨の研究に満足するが若きは、一に研究の熱情なきに因る。顧ふに研究の熱情は、學術を尊重するに由りて發し、學術の尊重は、學術を理解するに由りて生ず。應に知るべし、學術を研究せむとする者は、必ず先づ學術を理解せざる可からざることを。Charles Richet 曰く、

Ce n'est ni la persévérance, ni le labeur, ni le hasard qui m'ont permis de réaliser quelque chose d'utile. C'est ma confiance invincible en la puissance de la

science.

Dites-vous bien cela, jeunes gens qui m'écoutez, et sachez, que la condition essentielle du succès, c'est le feu sacré.

學術の研究は問題の選定より始まる。初學問題を選ぶには、特に天才ある者の外、先づ淺近の小問題を取るを可とす。問題已に定まらば、銳意研探の歩を進め、進路若し窮せば力めて之を拓開し、立案誤あらば直に之を修改し、之を行ふに誠意と熱情とを以てせば、必ず解決の境に達せむ。幸に是に由りて前人未知の事理を闡明することあらば、學術研究の自信乃ち生じ、獨立研究家の資格乃ち成る。子思曰く、譬如行遠。必自邇。譬如登高。必自卑と。

又設令淺近の小問題たりとも、陸續解決して許多の事理を闡明せば、其成績は聯結して偉大なる體系を成す可く、其學界に裨益し人生に嘉惠する所、未だ必しも單獨なる大問題に譲らず。孟子曰く、孔子集大成と。

初學始より驚天動地の業績を夢想して、徒に高遠なる大問題を選ばば、左抵右拮、進退俱に窮し、遂に一事一理を發明せずして已むに至らざるは幾ど希なり。又小問題の研究に陸續成功する者、隨時業績を論述して遲怠なく之を發表せば、研究に對する思想は自然に鍊熟し、修辭達意の技能も自然に進長せむ。若し徒に高遠の大問題を抱き、荏苒爲すなくして歲月を過さば、思想は益枯渴して筆端は愈窘縮せむ。 Friedrich Paulsen 曰く、

Meditation, Disposition, Formgebung, Stil, das alles sind Dingen, die einrosten,
wenn sie lange Zeit ungeübt bleiben.

學術の研究は、必ず人格の修養と相悖らざるを要す。由來本學は研究の自由を尊重す。然れども研究自由の範圍は、國禁に觸れ、又は本學若くは社會の秩序を紊す可き行動に及ばず。此の如き行動は、獨り人格の修養と相悖るのみならず、學生の本分に反し、其前途を誤るの虞あり。故に設令之を以て研究の手段とするも、又は研究結果の實行とするも、本學は其使命に鑒

み、義に於て宜しく之を禁遏すべく、且學生の前途を憂へ其危虞を慮るの情に於て、又之を放任するに忍びざるなり。更に注意す可きは、凡そ此種の行動は、必しも直接の意識に由りて行はれず、往日常の動靜云爲より、知らず識らず此の如き結果を馴致することあり。故に學生たる者は、獨り直接國禁に觸れ、公安を害する行動を戒慎す可きのみならず、尙此の如き結果を馴致するの虞ある動靜云爲を猛省して、自から之を抑制せざる可からず。

凡そ各般の研究に就ては、學内専門の教官諸賢ありて存し、能く後進を指導して研究の正路に就かしむ。諸子が其指導の下に、慎重の態度と熱誠の心意とを以て研究に従事し、以て如上の危虞を免れ、優良の成績を累ねむこと、余の切望して已まざる所なり。

第三 人格の修養

余は屢人格の修養を論述し、其綱要を剛健の氣を治め、誠實の心を養ふの二端に歸せり。夫れ剛健の氣は勇なり、誠實の心は誠なり。勇は人格の筋

骨にして誠は人格の神髓なり。其筋骨を健にして其神髓を壯にす、人格の修養孰れか是より重き者あらむや。 Friedrich Paulsen 曰く、

Tapferkeit im vollen Sinne ist die männliche Selbstherrlichkeit des Willens
über die Naturseite des Wesens.

中庸に云く、誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴と。

修養の成否は、固より各自の力行何如に存す。而も其力行を指導し激勵する所以は、先進の訓迪と朋友の切磋とに在り、其訓迪を仰ぎ切磋を求むる所以は、先づ其親信和好を得るに在り、而して親信和好は禮に由らずむば得難し。乃ち知る師に事へ、友に交はるの禮は、實に人格修養の先務に屬することを。韓詩外傳に云く、凡治氣養心之術。莫徑由禮。莫優得師。莫慎一好と。

禮は各般の共同生活に於て各人の行動を律し、以て相互の和好を合する者なり。凡そ世に處り人に交りて事を行ふ者、孰れか此道に由らざるを得

むや。曲禮に云く、道德仁義。非禮不成。教訓正俗。非禮不備。宦學事師。非禮不親と。

時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、世として禮を尙ばざるはなく、邦として禮を重ぜざるはなし。世界戦後、英國教育局の公布せる訓告に左の一節あり。禮の學校生活に重要な所以が、如何に英人に痛感せらるるやは、此に於て想見するに餘あり。

The every-day incidents of school-life will enable the teacher to impress upon his scholars the importance of mutual courtesy, of cheerful obedience to duty, of consideration and respect for others.....

獨り我邦に於ては、近來禮節の尊重漸く衰へ、即ち父子昆弟の際に在ても、往往非禮の言動を敢てし、恬として耻ぢざる者あり。殊に學生生徒の受業師に於けるが如きは、殆ど尋常行路の人に等しく、恭敬の意、瞻依の情は、將に地を拂て盡きむとす。夫れ天下至重の物は、學術に過ぐるは莫く、人生至貴の

人は、學術を講明する人に過ぐるは莫し。今乃ち其人を藐視し其禮を忽略して、路人を視るが如くするは、抑も何の心ぞや。此れ畢竟學術の價値を解せず、其尊重す可きを知らざるに由らずむばあらず。此の如くして其訓迪を仰ぎ薰陶に浴せむと欲するは、亦難からずや。

友に交はるの禮に至ては、缺略更に甚しく、頃刻の榮を競ふて積年の交を忘れ、錙銖の利を争ふて金蘭の誼を舍つる者あり。此の如くして激勵切磋の益を得むと欲するは、木に縁りて魚を求むるよりも難し。余は一昨年、宣誓式に於て交讓互敬の二事を提げ、以て同人和協の要訣と爲せり。友に交はるの禮は主として茲に存す。諸子の翫索して大に得るあらむことを望む。

第四 身體の鍛鍊

如何に學術に秀で、如何に人格に優るも、身體虛弱なるときは、以て學業の大成を期し難し。由來堅忍なる意思是、概ね康強なる體軀より生じ、明敏な

る智能は、常に健全なる頭腦より發せり。身體の鍛鍊が學業の進修に少く可からざる所以は、更に多言を要せず。

身體を鍛鍊するの道は、或は各種の運動競技に由りて筋骨の強健を加へ、或は山谷の跋涉、湖海の游泳に由りて氣力の壯剛を増すに在り。諸子各資質の適する所、興味の生ずる所に向ひ、學習研究の餘力を舉げて之に傾注せむことを望む。既に學習研究の餘力を身體の鍛鍊に注がば、疾病の抵抗、内に足りて、心神の慰安、外に待つなく、悪友の誘惑も乗ず可きの虚なく、邪慾の想念も萌す可きの機なく、身を誤るの治遊も、自から招く病魔も、入る可きの路なし。既に身心を強健にして、又疾患を防遏す、洵に是れ一舉兩得の道なり。

諸子。人生の至樂は、實に學生在學の歲月に存す。親しく天下の名賢に従ひて遊び、廣く四方の英俊と與に交はり、學を種々文を續みて、人生の愁苦を知らず、道を講じ、理を窮めて、外物の拘束を受けず、身は有爲の春秋に富み

て、心は前途の希望に充ち、浩乎として長江大河に臨むが如く、藹乎として春風煦日に坐するが如し。先哲が學生生活を以て陽春花時に比せしは、誠に深長の意義あり。夫れ花時の滋培厚からずむば、秋實の遂成期し難く、風雨の障害防がずむば、幹枝の碩茂保し難し。諸子の爲に其滋培を加給し、風雨を防禦し、以て幹枝の碩茂を助くるは、本學の使命なり。其滋培を吸收し、障害を抗拒し、以て秋實の大成を期するは、諸子の本分なり。自愛せよ諸子、諸子の前途は多望なり。自重せよ諸子、諸子の任務は重大なり。

昭和二年宣誓式告辭

大學生は學術を攻究し、人格を修養して、他日社會の儀表と爲り、一世の指針と爲るべきものとす。此れ實に大學生の本分たると同時に大學生の名譽なり。此名譽を保全して損傷せざるは、入學諸子の尤も心力を注ぐべき所なり。故に余は如何にして此名譽を保全すべきかに就き、茲に鄙見を披瀝して、諸子の省察に資せむとす。

Friedrich Paulsen の説に據れば、學生の名譽は剛毅、獨立、誠實の三徳より成り、三徳備はれば名譽乃ち全く、一徳虧くれば醜辱即ち來る。苟も然らば、學生の名譽を保全するの道は、即ち此三徳を修養するの方に外ならず。請ふ先つ三徳の各項に就て、榮辱の由て來る所を示さむ。

第一 剛 毅

余は大正九年の宣誓式に人格修養の要道を示すに當りて、剛健の氣を治

め、誠實の心を養ふの二綱を提げ、更に剛健の氣を分ちて勇敢、堅忍、克己、虚懐の四目と爲せり。茲に擧ぐる所の剛毅も、亦勇敢、堅忍、克己等の諸徳を包含して其義を成せるものにして、所信を行ふの勇健、過失を改むるの果敢、本分を守るの鞏固、私慾を制するの謹嚴、均しく剛毅の心象に屬す。唯夫れ之あり、始めて學術の攻究を遂行すべく、始めて人格の修養を大成すべし。大學生の名譽は蓋根基を此に取る。

學生にして剛毅の徳を虧けば、即ち怯懦の弊竇に入る。J. G. Fichte は怯懦を以て重大なる三罪惡(怠惰、怯懦、虚偽)の一と爲す。怯懦の學生は、所信を行ふに勇敢ならず、本分を守るに堅忍ならず、故に險難を畏れ、煩勞を憚り、事に當りて狐疑し、機に臨みて逡巡し、進取の意氣は沮喪し、向上の雄心は衰耗し、或は心を小利に動かし、或は志を幻榮に喪ひ、或は業を外慕に徙し、或は學を半途に廢し、流れて薄志弱行の小人と爲り、墮ちて無爲無用の廢物と爲る。名譽の損傷、面目の失墜、孰れか是より甚しきものあらむ。

剛毅ならざるの弊にして尤も恐るべきは放恣なり。是れ克己制慾の謹嚴ならざるに因る。本學は學生の名譽を重んじ、敢て嚴督苛察を加へず。學紀の許す範圍に於て之をして自由に師に親しみ、自由に友と交はり、自由に業を修め、自由に徳に進むを得しむ。夫れ自由は人生の至寶なり。而も其至寶たる所以は、眞正の自由に存して、相似の自由に存せず。眞正の自由は、責任の負擔を自覺し、自ら制し、自ら律して、他人の強制を受けざるを謂ひ、之を己に用ゐて自ら窮せず、之を人に施して相悖らず、是れ其至寶たる所以なり。夫の自己の責任を思はず、自己の節制を守らず、唯他人の強制を受くるを厭ふものは、是れ放恣にして自由にあらず。之を人に施せば、事毎に相悖り、之を己に用ふれば、久しからずして自ら窮す。其至寶たる所果して何くにか在る。

放恣の弊に二種あり。私心の好む所に任せて放辟の言動を逞するは其一にして、私慾の誘ふ所に徇ひ、放蕩の品行を肆にするは其二なり。二者均

しく學生の本分に戻り、其本業を怠るものにして、其名譽を損し、面目を傷ふこと固より多言を須みず。但放辟の言動は雷同附和、若くは阿世媚俗の弊と合して往々重大の罪惡を醸成するが故に、後段獨立の項下に之を敘せむ。放蕩の品行に於て尤も恐るべく惡むべきは、酒色の耽溺なり。酒色に耽溺するの弊は枚擧に勝へず。光陰の多消、財物の浪費、學業の荒廢、智能の衰耗、品性の墮落、病毒の感染は其尤も著しきものなり。

青春は再び來らず、晩學は功を成し難し。光陰の多消、學業の荒廢、豈に細故ならむや。智能の衰耗、品性の墮落に至ては更に是より大なるものあり。人或は曰はむ、青年一時の遊蕩は深く憂ふるに足らず、早晚悔改の日あるべし。葡萄の新釀は、一時盛に醱酵するも、時を経て醱熟すれば、必ず醇良の美酒を得べしと。此くの如き悔改者は絶無にして僅有なり。多くは是れ遊蕩の久しき、善良の本性を喪ひ、頽墮潰敗救治すべからざるに至る。

Verflagen ist der Spiritus,

Das Phlegma ist geblieben.

更に病毒の感染を慮れば、洵に戰慄すべきものあり。先づ酒害を説き繼で性病に及ばむ。飲酒常習を成すものは酒毒身體の各部を侵害す。消化器、循環器、泌尿器、神経系統等一として其害を被らざるものなし。殊に恐るべきは肝臟硬變、血管硬化、腎臟萎縮等の如き不治の疾病なり。其害の神経系統に及ぶや、理解、記憶、判断の諸力を減じ、甚しきものは精神異狀を起して斃る。殊に悲惨なるは、害毒子孫に及びて家門の衰頽を致すが如きこと是なり。

且夫れ飲酒の常習者は、設令如上の中毒症狀を發するに至らざるも、克己自制の力を失ひ、粗豪暴慢の行動を敢てするに至るは、常見の事實に屬す。飲酒の利を説く者或は云ふ、酒は酒精の含有に因り、快感を誘發し、消化を促進し、又温量を加給すと。而も事實は利する所、害する所の什一を償はず。

Rudolf Abel 曰く、

Die Zeiten, wo man über Absinenten als Sonderlinge lachte, sind endgültig vorbei, wenn sie auch kaum 10-20 Jahren hinter uns liegen.

本邦に於ても禁酒家を目して變人と爲し、嘲笑したる時期は亦已に經過せり。性病の恐るべきは酒害に譲らず。從來歐米諸國並に本邦に於て諸家の精査せる所に據れば、性病は他病に反して教育資産ある者に多し。Blaschkeの言に據れば、伯林學生中性病を患ふる者は總數の二十五%に居ると。本邦學生中の性病患者に就ては、未だ精確なる統計を見ざるも、其比率は伯林學生に多く譲らざるを疑はず。性病中尤も畏るべきは梅毒なり。梅毒一たび身に入りて速に治せずむば、臟器にして其侵害を受けざるはなし。殊に畏るべきは、或は腦、脊髓を侵し、或は循環器を害し、以て有爲の俊才を廢物に歸し、又は不測の暴死を致すの類是なり。

顧ふに梅毒に治法なきにあらざるも、浸假して慢性を成さば、全治を得ること極めて難し。且其病毒は一身に止まらず、配偶に感染し、子孫に遺傳し、

層層波及して窮まる所を知らず。當初制慾の一著を失せば、流毒の及ぶ所一に此に至る。豈に唯だ一身の面目を辱め、一世の名譽を失ふのみならむや。Theobald Zieglerが獨逸學生に與へたる警語は、移して以て諸子の戒と爲すに足る。

Hier ist ein breiter Schmutzleck auf der Fahne deutscher Mannesehre, ein Schmutzleck auch auf Ihrer studentischen Ehrenfahne; an Ihnen ist es, die Fahne sauber zu halten, an Ihnen ist es, über Ihre Ehre zu wachen.

第二 獨立

獨立とは自己の信念を主とし、自己の能力を恃み、他人の扶持救援に依頼せざるを謂ふ。此精神は其發動の方向若くは態様に從ひ、或は自信と爲り、自恃と爲り、或は自主と爲り、自助と爲る。其進むや勇敢にして、其守るや堅忍なり。要するに剛健氣中の一心象に外ならず。

凡そ斯世に立ち、斯民と處るもの、無爲無能、人後に落ちて恥ぢず、下流に淪

みて悔いざらば則ち已まむ。苟も一事を成し、一功を建て、卓然樹立する所あらむと欲せば、獨立精神の其心身を主帥し、志氣を督勵するなくして可ならむや。殊に學術の攻究、人格の修養を生命とし、社會の儀表、一世の指針を本領とする大學生に於て、此精神の旺弱は直に生命の殺活、本領の得失に關す。獨立が名譽の一大要素たること復た絮説を要せず。

獨立の精神纔に衰ふれば、依賴心即ち生ず。依賴心は學業の賊にして成功の敵なり。然るに近時學生中往往依賴心を以て其事に従ふものあり。例へば學業の全部を教官の講明に依賴し、曾て自ら研討玩索を試みざるが如き、教官の講説を聽くに、豫め之が準備を爲さず、退きて追思覆覈を加へざるが如き、圖書の参考すべきあるも、自ら之を閱せず、事物の實驗すべきあるも、自ら之を驗せず、僅に前輩同級の談論筆記に依りて、巧みに其要處長處を剽竊するが如き、甚しきは自ら講筵に列せず、親しく教官に接せず、日後朋友の筆記を借覽して、坐ながら講義の要領を抄收するが如き、一として依賴心

の發露ならざるはなし。此くの如きは自ら眞理攻究を賊するものにして、其面目を傷ひ、名譽を損する所以は、識者を待ちて知らず。

學問思辨は、學業の由りて成る所なり。博く學び、審に問ひ、慎みて思ひ、明に辨ず。四者一を缺くも其功を成さず。憤悱啓發は、義理の由りて通ずる所なり。憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず。自ら之を勉むるにあらずむば其力を得ることなし。今や學びて問はず、問て思はず、思て辨せず、況や憤悱の努力、啓發の功效、夢にだも想到せざるに於てをや。誠に此くの如くならば、設令高賢の教を受けて、精明の説を聞くも、宛も肥鮮美肉を飽餐して、咀嚼消化を爲さざるが如く、啻に榮養に少補なきのみならず、適ま以て消化機能を沮害するに足る。荀卿曰く、小人之學也。入乎耳。出乎口。口耳之間。則四寸耳。曷足以美七尺之軀哉。

權威信仰の弊も、亦獨立の精神を缺くより起る。凡そ學者の生命は研究に在り。研究の神髓は獨創の識見に在り。故に本學は夙に學生の獨創研

究力を養ふに留意し、規制に設備に著著此意を推行せり。然るに自ら信ずること篤からず、自ら主とすること固からざるの徒は、往往至上の權威を先進の名家に捧げ、絶對の服従を既定の學說に致すを免れず。此れ亦自ら學生の名譽を抛擲するものに非ずして何ぞや。

雷同附和の弊も、亦獨立の精神なきより起る。茲に一流の異説を立てて萬衆の視聽を傾け、一道の奇策を建てて一世の風氣を煽るものあり。其正邪を辨ぜず、其利弊を察せず、擾擾囂囂衆愚と齊しく和鳴し、群盲と偕に妄動する、是を雷同附和と爲す。雷同附和の言動は、教養なく學識なき庸人小夫に在ては猶ほ恕すべし。高等普通學の素養を具へ、最高學府の學籍に列するものにして、衆愚群盲の後塵を逐ふに至ては、豈に陋劣恥づべきの極にあらずや。

雷同附和に類して一層醜陋なるを阿世媚俗の弊と爲す。自己の所信を曲げて世論に阿附し、自己の所學に負きて時好に投合するもの是なり。蓋

し雷同附和は、確乎たる定見なく、毅然たる持論なきに起るも、阿世媚俗は、故らに定見持論を曲げて、容悅を世俗に取るものに係り、其醜陋の心事、殆ど唾棄に堪へず。獨立精神の喪失、此に至て極まる。

近時青年往往内外思潮の洶湧に乗じて、詭僻の言論を唱へ、危矯の行動を爲すものあり。其弊源の在る所を尋ぬるに、或は雷同附和の慣習に因り、或は阿世媚俗の心事に出で、或は之に加ふるに放肆自恣の性癖を以てするものあり。顧ふに人心道心の危微、日一日より急なる今日に於ては、此種の一弊、已に以て身を誤まり世を害するに足る。況や二弊を合せて之を行ふに於てをや。其秩序を紊し法網に觸れ、百年の身名を破りて天下の笑と爲るに至るは、殆ど怪しむに足らず。而も其濫觴は纔に獨立克己の精神を缺きたるに外ならず。流弊の及ぶ所曷ぞ寒心に勝ゆべけむや。

第三 誠 實

誠實は百行の樞機にして、人格の骨髓なり。余は嘗て其要目として、己を

持するの正直、人に接するの懇篤、事を行ふの精確を舉示せり。夫れ己を持すること正直なり。故に言行一致、期約違はず。人に接すること懇篤なり。故に人の美は輔けて之を濟し、人の過は戒めて改めしむ。事を行ふこと精確なり。故に觀察は必ず周到、實驗は必ず的實。誠に此くの如くにして面目の立たず、名譽の揚がらざるを欲するも豈に得べけむや。

誠實の虧缺より名譽の失墜を致すものは、一にして足らず。就中青年學生の通弊として尤も戒慎すべきもの三あり。食言なり、虚榮なり、妬忌なり。食言とは、期約然諾を重んぜざるを謂ふ。即ち言行の一致せざるなり。人に對して信なきなり。孔子曰く、人而無信。不知其可也。大車無輓。小車無軌。其何以行之哉。又曰く、自古皆有死。民無信不立。と其餘信の美德を稱し、無信の惡弊を戒むるもの、古今其言に乏しからず。殊に朋友の信は、五倫の一に居り、信なければ朋友なし。切磋の益、匡輔の仁、誰に従つて之を求めむ。而して道を修め徳に進まむと欲するも、亦ただ難からずや。

食言の不徳は、獨り東洋先覺の之を嚴戒するのみならず、歐洲學界に於ても其弊害を切言するもの少からず。Fichte は食言を痛論して曰く、

Selbst zur Erlösung der Menschheit würde ich mein Wort nicht brechen.

又 Ziegler は學生に食言を嚴戒して曰く、

Feigheit und Falschheit in jenem beschränkten Sinne des Wortbruchs verbietet auch die studentische Ehre.

虚榮とは實質以上に外面を粉飾するを謂ふ。貧賤にして富貴を粧ひ、愚劣にして賢俊を粧ひ、淺陋にして博雅を粧ふの類は皆是なり。其己を欺き人を欺くの心事は、殆ど一嚱にも値せずと雖も、而も此陋習社會の各界を風靡して、青年學生に波及し、輾轉して種種の罪惡を醸成するに至ては、得て黙止すべからざるものあり。

大凡そ虚榮は奢侈を伴ひ、奢侈は浪費を致し、浪費は負債を生ず。奢侈とは個人の肉體又は精神即ち智徳の發達向上に必要ならざる消費を謂ふ。

通常之を分つて収入以上の消費、身分以上の消費、知識趣味以上の消費の三と爲す。夫れ必要ならざる消費は浪費にあらずや。然らば則ち奢侈は即ち浪費なりと謂ふも殆ど不可なし。但収入過少にして、身心の必要を辨ずるに足らざるものは、消費、収入の上に出づるも、奢侈の限内に入らざるや論なし。其餘は三類の何れに屬するも、均しく是れ奢侈にして、其動機は均しく是れ虚榮なり。虚榮の人生に於けるや、害あるも益なし。人生須要の財物を揮ひ、之を有害無益の心事に投ず。設令収入餘りあるも、其事已に罪惡たらずとせず。抑も浪費の積む所、負債叢生し、産を破り家を傾け、禍を子孫に貽し、辱を父祖に及ぼすは、理勢の避け難き所。一弊數弊を生じ、一罪數罪を招く、巨萬の富豪も且免れず、況や學資を父兄の恩資に仰ぎ、若くは獎學の義助に受くる青年學生に於てをや。Friedrich Paulsen 曰く、

Schulden bedeuten eine Minderung der Freiheit und der Ehre; sie sind dem Darleher zum Pfand gegeben.

妬忌とは人の才學聲望、己の上に出づるを妬み、或は種々の手段を弄して其進修を沮害し、或は種々の惡語を傳へて、其聲望を毀傷するを謂ふ。其心事の陋劣、男子の口にするを屑しとせざる所なり。而も青年學生に於て、往往其實例を見ることあるは、浩歎の至に堪へず。顧ふに交讓互敬の要は余の夙に提唱したる所の如く、人の聲望を重んずるは、即ち己の聲望を重んずる所以にして、人の進修を輔くるは、即ち己の進修を促す所以なり。今乃ち人の聲望を妬みて之を毀傷す、己に於て何の得る所かある。人の進修を忌みて之を沮害す、己に於て何の益する所かある。啻に得る所益する所なきのみならず、罪を學界に獲て、譏を識者に取る。名譽の喪亡、面目の失墜、復た何を以て之を免れむや。大學生の名譽を組成する徳と、之を損傷する弊は、略ぼ上述の如く、徳の虧くる所は弊の生ずる所、弊の滅する所は徳の興る所、一徳興れば衆徳繼ぎ興り、一弊生ずれば諸弊並び生ず。已に然らば、學生の名譽を保全するの道は他なし、之を損傷する諸弊を除くこと是なり。之を

損傷する諸弊を除くの法は他なし、之を組成する諸徳を修むること、是なり。剛毅なり、獨立なり、誠實なり。通じて之を言へば、剛健と誠實となり。剛健の氣を治め、誠實の心を養ふ、是を人格修養の要道と爲し、又是を名譽保全の大本と爲す。

諸子。諸子の名譽は本學の名譽なり。諸子其名譽を全うして、本學の名譽乃ち全し。諸子の名譽は本邦學界の名譽なり。諸子其名譽を揚げて、本邦學界の名譽乃ち揚がる。諸子が社會の儀表と爲る所以は實に斯に在り。諸子が一世の指針と爲る所以も亦斯に在り。諸子其れ旃を勉めよ。

昭和三年宣誓式告辭

新入學生諸子。

本學は大學令第一條の明文に遵ひ、國家に須要なる學術の理論及應用を教授し、其蘊奥を攻究し、兼て人格の陶冶及國家思想の涵養に留意するを使命とするものなり。故に本學學生たるものは須らく國家に須要なる學術を研習し、各自の人格を陶冶し、國家思想を涵養するを本分とすべきこと多言を待たず。學術の研習に就て學生の留意すべき要項は、歷年の新入學生宣誓式に於て反覆告明したれば、今復た絮說せず。人格の修養に就ても亦屢説示する所ありしも、時勢の急要は、一層戒慎警懼を促すものあり。故に本日は人格の陶冶及國家思想の涵養に關し、最も深く留意すべき要項を擧げて、諸子の省察に資せむとす。

第一 人格の陶冶

完全なる人格を構成すべき要素中、諸子の最も深厚に修養すべきもの三あり。一に自制心、二に堅實なる判断力、三に責任感是なり。

一、自制心。自制とは理性を以て諸慾諸情を統制するを謂ふ。人にして自制心なくむば、諸慾諸情恣のままに發動し、邪念妄想息む時なく、意志の自由は甚しく沮止せられ、精神の統一は全く散失す。殊に青年學生に在ては、獨り心力を學習研究に專にすること能はざるのみならず、諸種の劣情是より起り、諸般の惡徳是より生じ、其極、放肆邪恣爲さざる所なきに至る。人格の低下、品性の墮落、豈に是より甚しきものあらむや。

自制の虧缺は獨り意志の自由を沮止するのみならず、又行動の自由を尅減す。凡そ自由は、唯だ各人克己制慾の上に於て始めて之を見る。若し人各己の欲する所に隨ひ恣のままに行動し、曾て秩序の之を節制するなくむば、侵陵爭奪、隨處に續發し、生命財産の安全も且保すべからず、復た何れの處にか行動の自由あらむや。故に國家は法規を設け、社會は秩序を定め、以て

各人をして己に克ち慾を制し、以て成るべく寬博なる自由を享受せしめむことを期せり。學生の學習研究に於ける自由も亦然り。本學は諸子が尤も寬博なる自由を得るを希ふこと極めて深し。故に諸子が法規に遵ひ秩序を守りて、己に克ち慾を制するを望むこと愈切なり。

自制心を養ふの法は一にして足らず。而も其最も有效なるは、志氣の作興、精神の統制、克己の習鍊等なり。志氣を作興するの要は發憤努力に在り。發憤して大志を立て、之を以て奮闘の主帥と爲し、富貴に淫せず、威武に屈せず、以て勇往邁進するなり。精神を統制するの要は専心銳意に在り。渾身の力を所志の學業に注ぎ、滿腔の思を當面の問題に集め、他念を萌ささず、外慕を生ぜず、銳意進修、斃れて後已むなり。克己を習鍊するの要は規律節制に在り。言行を慎み、飲食を節し、奢侈を戒め、禮讓を守るなり。

二、堅實なる判断力。堅實なる判断とは、公私諸般の問題に就て健全なる知見を有し、精確なる斷案を下すを謂ふ。凡そ社會に立ち事物に接し、去就

出處を誤まりて大辱を招き、進退舉措を失して大敗を取る者、一として堅實なる判斷力の虧缺に坐せざるはなく、青年學生時好に阿附し、俗見に雷同し、或は邪僻の言論に惑ひ、危激の風潮に投じ、浸淫沈溺して遂に救回すべからざるに至る者も、亦此判斷力の微弱に坐せざるはなし。顧ふに危言邪説の人心に入るは、人心に間隙の投ずべきあるに因る。堅實なる判斷力の虧缺は、人心の一大間隙なり。故に危言を高唱し、邪説を宣傳する者固より罪あり、而も其投ずべき間隙を塞がざる者も亦罪なしと爲さず。豈に深く懼れて大に戒めざるべけむや。

堅實なる判斷力を修養するは、水準高き常識を養成するに在り。水準高き常識を養成するは、各學専門の大家に従ひ、各科專修の學生に親しみ、精確にして且廣博なる知見を開發するに在り。

三、責任感。責任感とは、善惡の判斷力ある人が、自己の行爲の結果を其原因に歸屬せられたるとき、當然の歸趣として之を承認するを謂ひ、注意不充

分の爲に行爲が豫期せざる不結果を生じたるとき、其不充分なる注意到對して負擔を辭せざるも亦此中に屬す。

責任感は多般の徳性を伴ふ。今其主要なるものを挙げむ。第一に責任感は犠牲の精神を包含す。如何なる重譴大禍も、己れ之が犠牲と爲りて累を他人に轉嫁せざるは即ち犠牲の精神なり。唯だ犠牲の精神、内に存して責任の負擔始て全し。次に責任感は慎獨の誠意を伴ふ。功罪禍福、一身に負荷して何人にも推諉せず、故に監督せずと雖も怠るなく、荒むなく、獎勵せずと雖も爲すあり守るあり。中庸に、君子戒慎乎其所不睹、恐懼乎其所不聞。莫見乎隱、莫顯乎微。故君子慎其獨。と云ふもの即ち是なり。次に責任感は擇善力行の熱情を促す。成敗得失、己れ其責を免れず、故に手段方法必ず最善を擇び、敢て苟偷姑息せず、困勉力行必ず目的の達成を期す。中庸に、有弗學、學之弗能、弗措也。有弗問、問之弗知、弗措也。有弗思、思之弗得、弗措也。有弗辨、辨之弗明、弗措也。有弗行、行之弗篤、弗

措也。と云ふもの即ち是なり。最後に責任感は反省自修の習慣を誘起す。凡そ責任の歸屬を自覺する者は、反省の急要を痛感し、常に己の心事を省察して成敗窮通の原由を反求し、過誤を覺知すれば改悛を憚らず、缺漏を發見すれば補正を怠らず。孔子の射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。と云ふもの即ち是なり。

責任感を修養するには、忠實、誠信、正義の三徳を長養するを要す。人に對し物に對し、必ず心を盡くし慮を殫くし、細故と雖も敢て忽にせず、小事と雖も敢て苟もせざる、之を忠實と謂ふ。人我一體、言行一致、期約を守り、然諾を重じ、内に省みて愧ぶべきの行なく、人に向て言ふべからざるの事なき、之を誠信と謂ふ。公平にして偏私なく、中正にして邪曲なく、進退道理に當り、舉措人情に合する、之を正義と謂ふ。

以上列擧したる所は、實に諸子の最も誠實に又最も熱心に修養すべき人格の要素なり。其修養の實行は、固より諸子の自修自養を主とするも、而も

先進の訓迪朋友の切磋に需つ所多く且大なり。自修自養に最も效益あるは讀書なり。讀て最も修養に益するの書は、聖賢の遺書、偉人の言行録、學界名家の自叙傳等なり。余は切に諸子の是に由りて偉人に私淑し、先哲に尙友し、感奮興起して存養省察の功を積まむことを望む。先進の訓迪、朋友の切磋に貴ぶ所は、獨り本師の提誨、同學の告戒に止まらず、多く學界の大家に接し、廣く有爲の士子に交り、常に未聞の談論を聞き、未見の事理を見るに在り。殊に水準高き常識の養成の如き、廣汎にして精確なる知見の啓發を要するものに在ては、尤も此の如き教益の必要を見る。此の如き教益は、唯だ各學部を並設し各學科を聯絡する綜合大學に於てのみ之を求め得べく、此特有の便宜を利用して修養の功を全うするは諸子の本分なり。此教益の特長を發揮して諸子の本分を全うせしむるは、本學の使命の一なり。

第二 國家思想の涵養

元來國家思想の涵養も、亦人格修養の一要端に屬す。唯だ其重大なるこ

と一般の修養に超越するに因り、特に專項を設け、以て其要領を示さむとす。國家思想の涵養に於て、最も慎重の留意を要するもの三あり。一に國體觀念、二に國民道德、三に國民精神是なり。

一、國體觀念。如何なる邦國も、苟も一の國家たる以上は、必ず其本質的特性を有す。此れ猶個人が一の人格として各特有の個性を具ふるが如し。之を名けて國體と云ふ。我國の本質的特性とする所は、萬世一系の天皇、民族大宗の元首として其位に登らせられ、舉國の臣民其心を一にして天皇を仰戴し、之を君として尊崇し、之を父として愛慕し、上下一體、與に俱に國家的理想の實現を協襄するに在り。此れ實に我國特有の國體にして、古今歴史の實證する所、歷代文獻の明徴する所、炳乎として日月の如し。我國民道德の由て起る所は此に在り。我國民精神の由て生ずる所も亦此に在り。

謹で此國體の要素を按ずるに、天皇の君臨は天倫に出づ。而して我帝國は肇めて國の基を開かせ給ひし天祖の宗家と其支族たる萬民とより成り、

四海を擧げて一家の親を成せり。故に天皇の寶位は啻に一國主權者の位なるのみならず、實に萬民總本家の家長の位なり。家長の位は自然にして當然なる位なり。故に又絶對にして不動なり。寶祚の隆、天壤と俱に無窮なる所以は此に存す。次に我君臣の分位も亦天倫上自然に定まれるものにして、決して偶然の機會、若くは人爲の規約に因るものにあらず。即ち民は皆臣にして臣は即ち民なり。故に上下の間、殊に恩愛戀依の情誼に厚く、専ら命令服従の關係を主とせず。前代列聖の訓諭に散見する義乃君臣、情兼父子。の語は、實に事實の眞にして空言の美にあらず。最後に我國の君民は、理想に於ても現實に於ても眞に同心一體に係り、歴代の天皇は下萬民の心を心として仁慈を垂れさせられ、舉國の臣民は上一人の心を心として忠誠を表したてまつる。此を我國に於ける君民同治の精神と爲す。此政體は憲法の制定、國會の開設に及て始て形式を備へたるも、其精神は遠く上代に胚胎して、夙に國體の根柢を成せり。

二、國民道德。我國民道德の最大要素は、忠君と愛國と是なり。忠君愛國の思想は、必ずしも我國の特有にあらず。唯だ其淵源たる國體の同じからざるに因り、其流出したる思想も亦異ならざるを得ざるなり。之を外國の例に觀るに、或は權力に屈從し、又は威武を崇拜し、之に臣屬して忠勤を勵むものあり。或は德業に歸依し、之が臣民と爲りて忠誠を表するものあり。二者均しく本來關係なき人が偶然相合して君臣と爲りたるものなり。故に又偶然相離れ相反することなきを保せず。設令離反せざるも、其忠誠は常に利害の見を雜へて、竟に不純たるを免れざるなり。

我君臣の分位は之と異なり、君は威力若くは德業に因りて偶然に其位に登らせられしにあらず。臣民は劣敗者若くは崇拜者として屈從的に又は打算的に其分に就きしにあらず。故に其忠誠は利害の顧慮より起るにあらずして、親愛の衷情より發するものなり。不純不定のものにあらずして、純眞不動のものなり。又外國に於ては忠孝其源を異にするを以て、往往二

者相反せんとするの憾なきにあらず。然るに我臣民の忠誠は、其君臣の分位より言へば則ち忠にして、本支宗族の天倫より觀れば則ち孝なり。是れ乃ち我國民道德の一特徴にして、忠孝一本の道、實に此に存す。

次に我國の愛國思想にも、亦一大特徴あり。日本國は萬世一系の天皇の統治したまふ所にして、之を外にして日本國あるを得ず。是れ乃ち君を離れて國なく、國を離れて君なきなり。又歷朝の天皇は常に民を以て國の本と爲させられ、未だ嘗て國に益するが爲めに民を虐げ、民に備ふるが爲めに國を戒めたるが如きことありしを聞かず。是れ乃ち民を離れて國なく、國を離れて民なきなり。是故に臣民は忠君の心を以て愛國の事に從ひ、愛國の情を以て忠君の誠を表したてまつる。愛國と忠君と相一致して相乖くことなし。是亦他邦に於て其類を見ざる所なり。

最後に留意すべきは國民道德と人類道德との交渉是れなり。世には二者の支吾若くは乖戾を恐るるものなきにあらず。而も是れ杞憂に過ぎず。

假に忠君愛國と正義人道との交渉を以て例案と爲さむに、忠君愛國の高唱が、果して國際平和を害するならば、是れ其高唱する忠君愛國の意義に誤謬あるに因るものにして、忠君愛國其物の罪にあらず。正義人道の鼓吹が、果して國民の結合を傷ふならば、是れ其鼓吹する正義人道の内容に缺陷あるに因るものにして、正義人道其物の咎にあらず。若し意義に誤謬なくむば、忠君愛國を擴めて正義人道に合せしむべく、内容に缺陷なくむば、正義人道を極めて忠君愛國を輔けしむべく、其融合して乖戾せざるは、猶孝悌の仁義と並び行はれて悖らざるが如し。

三、國民精神。國民精神の發露にして國民生活に最も重要なもの三あり。一に國語の尊重、二に國土の愛護、三に國史の體現是れなり。國語は國民精神の表現する所、國民文化の胚胎する所にして、又國民の心思を結束する紐帶なり。之を咀嚼し、之を精鍊し、之を展開すれば、國民精神の作興に資する所甚大なり。次に國土の愛護は、我帝國の領土を愛護するの謂なり。

此國土は我天祖の經營せられたる所にして、又我國民が三千年の文化を醸したる所なり。故に一郷一里の小も、一木一草の微も、皆其歴史を語るざるものなし。之を保愛護持するは、亦是れ國民精神作興の一要項にして、其重要なるは固より多言を待たず。最後に國史は一國文化の表現にして、國民精神の結晶なり。國史の歴載する國民精神に就て、華を摘み粹を抽き、時勢に照して形式を改め、事宜に應じて精神を表出するは、國民生活の最も意義あるものにして、之を國史の體現と謂ふ。國體の精華も是に由りて顯揚し、國民の道德も是に由りて向上し、國家理想の實現も亦是に由りて進展す。而も其歩武の第一著は活眼を開て國史を讀むに在り。

諸子が各自の人格を陶冶し國家思想を涵養するの要道は略ぼ上述の如し。而して其陶冶涵養の成否は繫りて力行何如に存す。力行して人格の偉大を成すも諸子に在り、放心して品性の墮落を致すも亦諸子に在り。諸子の力行を指導して修養の進路を示すは本學の使命なり。本學の使命を

善用して修養の實功を擧ぐるは諸子の本分なり。辜負する勿れ本學の使命、忽忘する勿れ各自の本分。

Säume nicht dich zu erdreisten,

Wenn die Menge zaudernd schweift ;

Alles kann der Edle leisten,

Der versteht und rasch ergreift.

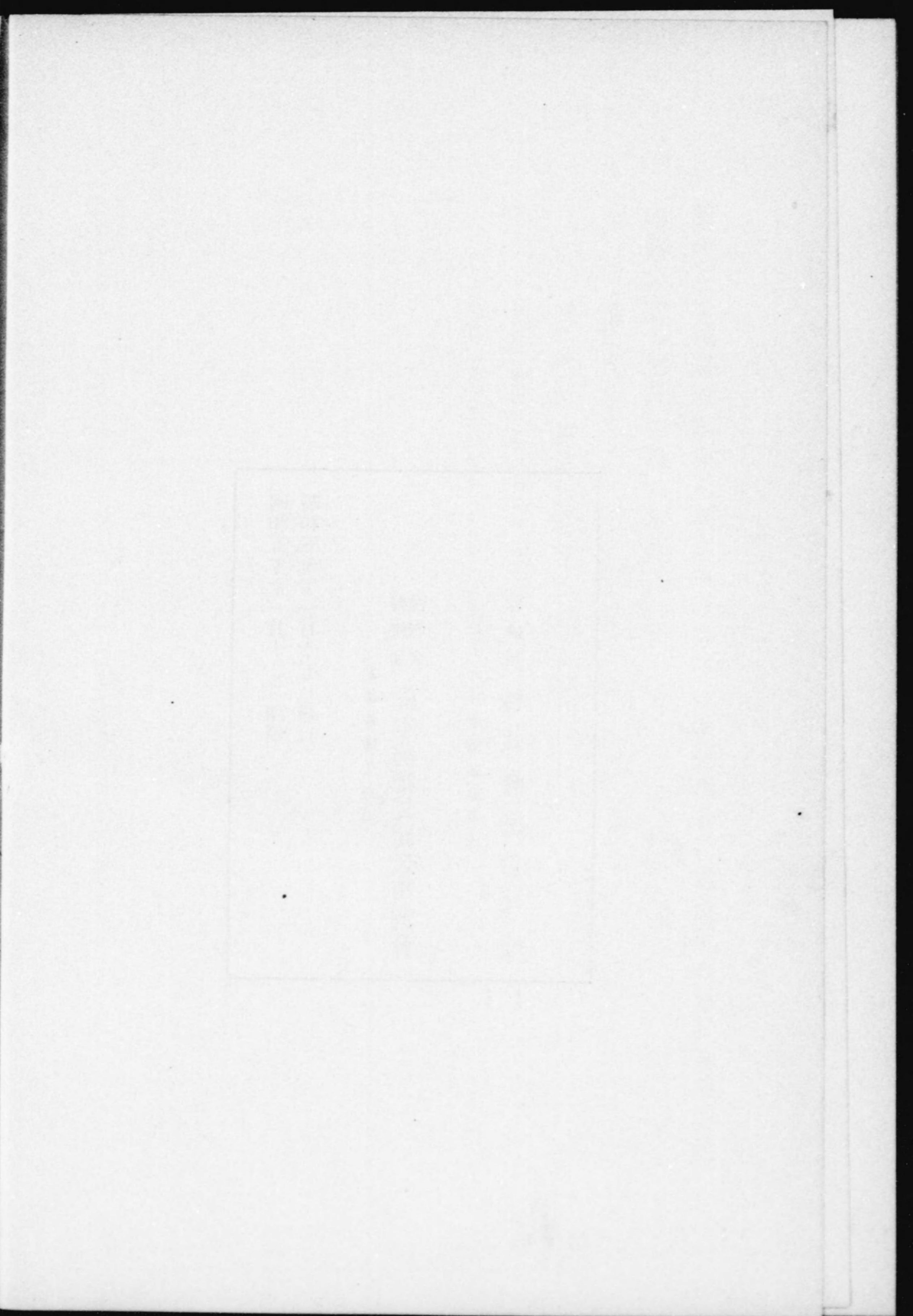
昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十五日發行

京都帝國大學内

編輯兼 荒木前總長記念事業會
發行者

京都市柳馬場三條

印刷所 株式會社似玉堂



昭和五年十二月九日

小牧實録

32.6.30

